

博物館等機関が保管している 摂津加茂遺跡出土遺物個人コレクション

合田茂伸

関西大学博物館 学芸員

1 摂津加茂遺跡をめぐる遺物収集家

関西大学博物館では、2023年度春季企画展「摂津加茂遺跡発掘70年展」[合田・今井 2023]を実施するに際して、博物館等機関に収蔵、保管されている摂津加茂遺跡出土採集資料個人コレクションの所在情報を調査した。調査は、関西大学博物館学芸員合田茂伸、学芸員今井真由美、博物館スタッフ田中詢弥（関西大学大学院）が共同して、企画展展示準備調査および企画展開催後の補足調査として行った。主な調査日程及び調査担当者は調査項目ごとに別記した。本項は、その調査成果を合田がまとめ、執筆したものである。なお、掲載した写真は、特記したものを除いて所有者等の許可を得て合田が撮影した。資料の所有者名等はそれぞれの項目に明記した。

企画展において示したように、摂津加茂遺跡は1915年、笠井新也が『人類学雑誌』第30巻第11号に摂津加茂遺跡として初めての学術的な踏査報告を行った[笠井 1915]頃から、多くの遺物収集家の踏査、採集行為を受けておびただしい数の遺物（石器・土器・玉・青銅器・貝製品など）が遺跡から持ち去られ、個人コレクションとなった。それらコレクションの一部はさまざまな経過をたどって博物館、資料館などに収蔵され、多くは館藏品となり、台帳、目録や展示によってその存在が知られることとなった。

本文で「遺物収集家」とするのは、多く用いられる「好古家」の概念が広く、規定があいまいであると考えためである。近年、日本における博物館史研究と並行して、近世・近代における古器物収集・調査史の研究において、しばしば「好古家」が用いられる（たとえば、[内川（編）2018-2020]、[米田・山口・渡邊（編）2020]）。考古学分野に限れば、近代考古学の方法を用いた研究であるか否かが、考古学と好古の分岐であると考えることがもっとも通りが良いであろう。また、「考古学者」と「好古家」の違いを近代におけるアカデミズムと非アカデミズム（ジャーナリズムあるいはエンターテインメントリズム）の対立概念として捉えられる可能性もある。いっぽう、遺物を収集する「好古家」は、遺跡を踏査して遺物を収集しつつ遺物の実測図やその出土状態を記録し、今日、考古学研究や埋蔵文化財保護の方法のひとつとして現代の考古学研究者が共有する分布調査同様の成果を残していることが少なくない。「好古家」と記述した場合には、意図するとしないうにかかわらず上述の対立概念を想起させ、それは状況によって異なって解されると考える。したがって、今に伝わるいくつかの個人コレクションを紹介しようとする本文に限っては、けっして「好古家」を表現として否定するものではなく、上述のような対立概念が生じることなく意味の揺れが少ない、遺跡の踏査やその他の方法による遺物の収集そのものをなした人、という意味で「(遺物)収集家」を用いることにした。

明治10年のモースの大森貝塚発見・発掘によって日本の考古学がスタートしたのち、民族起源論が勃興し、考古遺物発見記事が次々と新聞・雑誌に掲載されて各地で遺跡を踏査し遺物を採集する

遺物収集家が活躍した。遺跡・遺物を通じた自らの歴史の探求、遺跡を発見し採集した遺物の披露、遺跡踏査や遺物の比較を通して同好の士との交流、という欲求を満たそうと、大阪近隣では、国府遺跡や四ツ池遺跡と並ぶ遺物を採集しやすい遺跡として摂津加茂遺跡には多くの収集者が訪れた。たとえば、『京都大学文学部博物館考古学資料目録』〔横山・佐原 1960〕の「川西市加茂遺跡」資料欄には、資料数121点・寄贈者9人が記載されていて、そのなかには水野清一、藤澤一夫、坪井清足、横山浩一らの名とともに、兵庫県西宮の遺物収集家紅野芳雄の調査記録『考古小録』〔紅野 1940〕に何度も登場する田沢金吾や、辰馬考古資料館に膨大なコレクションを残した山田博雄〔辰馬考古資料館 1987〕の名もみえる（第1部掲載青木政幸氏論文及び瀬尾晶太氏論文を参照されたい）。

笠井新也は、摂津加茂遺跡に押しかける遺物収集家のようすを、

西宮史談会会員大挙して殺到する計画であるといふ。…（それに対抗して、地元の池田史談会の）会員の非常招集をかけて押しかけるといふ騒ぎである。その内西宮軍（西宮史談会）が襲来する。神戸史談会の連中までが助太刀という格で、福原将軍（福原会下山人）を先登に押し寄せて来る。…七月に入っては、大阪の御大将本山翁（本山彦一）が猛卒の面々を率いて出陣される。

と表現した〔笠井 1915〕（括弧内は筆者補）。これに対して、本山彦一は、

特に我々の注意してきたのは、河内国府の石器時代の遺跡であって、山崎直氏が初めて学界に紹介されてから依頼、自分も三四回此の地方を踏査し、多少の遺物も採集し得たのであるが、コレは主として神戸の福原潜次郎氏の懇懇指導に俟ったものが多い、（中略）及ばずながら京都大学にも進言して、本年六月にも京都大学が、此の地の一部を発掘調査されること、なり人骨其他の遺物を得られ、引続いて八月には鳥居氏が発掘を試みられた〔本山 1935〕。

と河内国府遺跡の踏査にあたって福原潜次郎（会下山人）の指導を受けたことを記して、後の国府遺跡の発掘調査に至った経緯を述べている。それを裏づけるように兵庫県の「福原会下山人コレクション」には1413点の国府遺跡出土遺物が含まれている〔水口 1987〕。京都帝国大学の濱田耕作（1881-1968）が実施した国府遺跡の発掘調査では、「余輩は此の発掘調査に関して本山彦一君、福原潜次郎君が当初より各種の助力と厚意を与えられたるを感謝し」と述べている〔濱田 1918〕。福原と並んで記名された本山彦一の助力は上に掲げた本山の一文に対応する。さらに、濱田は、国府遺跡の第2回発掘調査においても序言で本山への謝意を記し、あわせて当時大学院生であった辰馬悦蔵の報告書分担執筆の喜びを記している〔濱田 1920〕。辰馬悦蔵（北辰馬家3代悦蔵、1892-1980）は、のちに銅鐸のコレクションで知られる辰馬考古資料館を開設した〔高井 1988〕。濱田耕作はまた、同報告書序言に辰馬悦蔵、田沢金吾が両発掘調査に加わったことも記している。後に文化財専門審議会専門員となった西宮出身の田沢金吾は、西宮神社宮司であった吉井良尚、西宮の実業家紅野芳雄らとともに西宮史談会を起こした。発起人の一人であった紅野芳雄は上に述べた『考古小録』を残した〔吉井 1940〕。『考古小録』には、紅野芳雄の小学校以来の旧友、上述の辰馬悦蔵が跋文を寄せている〔辰馬 1940〕。また、自身が採集した摂津加茂遺跡や大阪空港 A 遺跡などの遺物が辰馬考古資料館に収蔵されている山田博雄は、遺物の採集に際して記録ノート「考古小録」7冊を残しているが、これは、紅野芳雄の記録ノート「考古小録」3冊などを編集して公刊した田岡香逸（1905-1992）の助言にしたがって作成したノートであった〔田岡 1987〕。

このように、遺物収集家はときに先を争って、ときに互いに教えあいながら、遠くあるいは近くの人々との交流を結んで遺跡の踏査、遺物の収集に情熱を傾けた。その活動は、1950年に文化財保

護法が施行されたのち、大学や行政機関による組織的な発掘調査が多くおこなわれるようになる昭和40年代まで、遺跡の保護や歴史の叙述に貢献した。摂津加茂遺跡の調査研究史を通覧するとき、各地の博物館等に残る遺物収集家による摂津加茂遺跡資料コレクションは、1952年にはじまる関西大学・関西学院大学による摂津加茂遺跡共同発掘調査の前史として位置付けることができる。

摂津加茂遺跡出土採集資料個人コレクションとしては、宮川雄逸が採集、収集し、1936年に開館した摂津加茂遺跡出土遺物の専門の私立博物館「宮川石器館」[朝日新聞社 1936]に展示されている資料がよく知られる。宮川の採集資料は、直良信夫[直良 1943]、藤森栄一[藤森 1943]、佐原真[佐原・横田 1968]ら多くの考古学研究者がその資料を調査して研究報告を行っている。関西大学が刊行した発掘調査報告書『摂津加茂』[末永 1968]では、その一部を図面及び写真によって報告している[末永 1968]。旧国摂津地域あるいは近畿地方の弥生時代の石器や土器を研究しようとする者は必ず訪れる博物館である。宮川石器館の現代的な意義を指摘したのは、岡野慶隆である。岡野は「開館以来ほとんど変わっていない展示室内の雰囲気は見ごたえがあり、考古学史や開館した時代性をよく伝える文化財といってもよいのではなかろうか。地域の文化財の保存や顕彰が、行政ではなく市民の手でまず始まったことを伝える好例でもある。」と評した[岡野 2006]。(写真1-写真4)

摂津加茂遺跡を考古学研究の俎上に載せた笠井新也は、1884年、徳島県美馬郡脇町（現在の美馬市脇町）に父笠井量平、母アイの長男として生まれた。地元脇町の尋常・高等小学校、中学校を卒業後、1902年國學院に入学し、1906年に國學院師範部国語漢文歴史科を首席で卒業した。卒業後、徳島県立高等女学校、徳島県女子師範学校、1911年に長野県立上田中学校を経て、1912年から1915年まで大阪府池田師範学校で教鞭を執った。1918年に帰郷後、地元の中学校、高等学校、徳島大学などで教壇に立ちながら、近畿・東海・山陽・東北などを巡って見聞を広げる一方、東京帝国大学理科大学人類学教室の聴講生として、同じ徳島県出身の鳥居龍蔵のもとで人類学や東洋考古学を学んだ。歴史・民俗・考古・地域史の研究を続け、1956年に71歳で亡くなった。大阪府池田師範学校の退職まぎわから1917年に帰郷するまでのあいだに摂津加茂遺跡を踏査し、『人類学雑誌』に論文「玉類・斎瓮及び彌生式土器を混出せる石器時代の遺蹟」を29ページにわたって掲げた。この論文の「四発見及び調査」をみると、笠井が摂津加茂遺跡を「発見した」のは1915年である。報告には、兵庫・大阪の遺物収集家がつぎつぎと遺跡踏査・遺物採集に訪れているようすをおどけた感じで、しかし、的確な表現で描写していて、当時の収集家の交流の一面を見ることができる[笠井 1915-1916]。

笠井新也の没後60年を期して、笠井の子息から寄贈を受けた遺稿や収集資料など笠井新也関係資料を展示した部門展示（人文）「没後60年 笠井新也」が2016年5月31日から7月31日まで徳島県立博物館で開催され、笠井の遺業が顕彰された[長谷川 2016]。なお、笠井新也の肖像写真掲載にあたっては、徳島県立博物館及び同館長谷川賢二氏のご高配を賜った。記して感謝の意とする。(写真5)

次項以降では、いくつかの博物館等に保管されている摂津加茂遺跡出土遺物個人コレクションの概要を記す。なお、煩を避けるため年代は西暦を用いた。

2 関西大学博物館蔵本山彦一収集資料

(1) 資料調査日程等

調査日程

2021年3月8日 関西大学博物館本山彦一蒐集資料の所在確認

2021年12月22日、2024年2月20日 関西大学博物館本山彦一蒐集資料の写真撮影

調査・写真撮影場所

関西大学博物館

調査者

合田茂伸 田中詢弥

(2) 調査資料の概要

本山彦一（もとやま ひこいち 1853-1932）は、1853年8月10日熊本県に生まれた。慶應義塾予科、政府租税寮、兵庫県庁を経て、1882年大阪新報社、1883年時事新報社、1886年藤田組支配人、1889年大阪毎日新聞社相談役（兼務）ののち、1903年に大阪毎日新聞社第5代社長に就いた。本山は、教育博物館（現国立科学博物館）での大森貝塚発掘の土器などの見学を通じて考古学への関心をもった、といわれる。官界や実業界で活躍する一方、遺跡の調査に情熱を燃やし、大阪毎日新聞社社長在任中に、河内国府遺跡、長門鑄銭司遺跡、肥前有田古陶磁器窯をはじめとして多くの遺跡の発掘調査や踏査をおこなった〔米田・山口・渡邊 2020〕。

濱田耕作が行った京都帝国大学の国府遺跡の発掘調査では、本山とともに福原潜次郎の名が協力者として掲げられている〔濱田 1918、濱田・辰馬 1920〕ほか、のちに文化財専門審議会専門委員に就いた田沢金吾が参加し〔濱田 1920〕、1976年に辰馬考古資料館を設立した辰馬悦蔵〔高井 1968〕が出土遺物の報告を執筆した〔濱田・辰馬 1920〕。田沢金吾は、西宮史談会の主要メンバーとしても活躍した。

本山彦一はまた、各地の遺跡出土品を収集し、1932年に設置した富民協会農業博物館内に「本山考古室」を開設した。末永雅雄（1897-1991）が編集し、本山の没後に刊行された『本山考古室要録』〔末永 1935〕の一部を引用する。

濱田耕作は「序言」で、

翁の如き偉大なる社会人新聞人にして、善く翁の如く考古学界の「パトロン」たる可き人は、容易に再び之を見出すことは期し難い。

と評した〔濱田 1935〕。一方、本山自身は、考古学への思いを「学術的興味と価値」（大正6年大阪毎日新聞掲載記事『要録』に再掲〔本山 1935〕）に記している。

我々は、書物を見るといふ事よりも多く実地を見、實物を集めて比較研究するより外はない、ソレで自分も楽しみ半分に参考となる資料を集めて見て、それが専門学者の研究に資することが出来れば幸であると信じて、本年夏先づ手初めとして和泉、紀州、大和、河内の石器時代の遺跡を踏査し、幾分の発見もし、学界に貢献した事もないではなかった、当時行を共にした鳥居龍蔵氏も相当学術上の収獲を得られたわけであった。

本山彦一が収集した考古学資料の多くは、1953年から1963年にかけて関西大学へ移管され、重要文化財22点（「河内国府遺跡出土品」／一括／考古資料／縄文／指定番号00268／1964年5月26日指定）を含む「関西大学博物館本山彦一蒐集資料」（19298点）として関西大学博物館の核コレクションとなっている。同資料は、「本山彦一蒐集考古資料／18945点／2011年6月27日／文部科学省告示

第14号」として文化財登録原簿（有形文化財）に登録されている。「本山彦一蒐集考古資料」の全貌及び個別資料の詳細、資料の形成過程については、『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』[関西大学博物館 2010] 及び『なにわ大阪と本山彦一』[米田・山口・渡邊 2020] を参照されたい。

『本山考古室要録』に合冊された「本山考古室列品目録」には、石器時代遺物、古墳時代遺物、参考資料に分類された1765件の考古学資料が掲載されている。その「石器時代遺物第2棚290番」(p.32)と「第VI函908番」(p.97)に「摂津国川邊郡川西村加茂」として、2件の摂津加茂遺跡の遺物が見える。2件に分かれているのは入手経路が異なるため、と推定できる。関西大学博物館において所在を確認したのは、前者17点で、『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』[関西大学博物館 2010] の44ページに「MY-S/0290/17点/石鏃13点・石錐4点/第2棚 290/石錐 石鏃/17(個)/摂津国川邊郡川西村加茂/兵庫県」として登録されている資料である。器種の内訳は、未成品を含む石鏃11点、石錐未成品3点、楔形石器1点、器種不明2点である。石質は黒色に近い暗灰色を呈するガラス質安山岩製で長さ3cm以下の小形品である。後者「第VI函908番」は『本山考古室要録』では「908/石鏃石錐石屑/136個/摂津国川邊郡川西村加茂/有茎多し」と掲載されているが、2010年の目録作成時及び2021年以降の収蔵資料確認作業の中では確認されていない。(写真6-写真8)

3 公益財団法人辰馬考古資料館蔵山田博雄収集資料

(1) 資料調査日程等

調査日程

2021年4月13日 山田博雄収集資料の所在の照会

2022年1月17日 山田博雄収集資料の熟覧・写真撮影

調査場所・写真撮影場所及びご対応者名

公益財団法人辰馬考古資料館（兵庫県西宮市松下町2-28）

青木政幸氏（辰馬考古資料館学芸員）

調査者

合田茂伸 田中詢弥

(2) 調査資料の概要

山田博雄収集資料は、公益財団法人辰馬考古資料館が所蔵している。資料の内容は同館が1987年に刊行した『山田博雄収集資料目録』[財団法人辰馬考古資料館 1987] に詳しい。また、本報告書第1部に同館学芸員である青木政幸氏による山田博雄収集資料に関する論文を掲載した。ここでは山田博雄の採集活動の概要を記しておく。

山田博雄（やまだ ひろお）は、1899年山口県に生まれた。1929年に兵庫県土木部、1937年から1939年まで大阪第二飛行場建築事務所、1972年から辰馬考古資料館設立準備室勤務に勤務し、1977年に同館を退職した。山田博雄の採集活動は、飛行場工事現場の大阪空港 A 遺跡で遺物採集をはじめたころからさかんになった。踏査の範囲はしだいに広がり、彼がつづった「考古小録」7冊（1937年—1951年）に記された踏査遺跡は、38遺跡に及んだ。採集遺物の多くは、辰馬考古資料館（1975年設立）において保存されている。『山田博雄収集資料目録』に掲載された遺物2678点（踏査回数2百回余）のうち、摂津加茂遺跡の採集資料は748点、踏査回数は63回で、他の遺跡を圧倒している。

山田は1944年に京都帝国大学文学部陳列館（後の京都大学文学部博物館、現在の京都大学総合博

物館)に石器(小形の鑿状柱状片刃石斧)1点(磨製石斧破片1個、登録番号4485)を寄贈している[横山・佐原 1960 (p.230)]。当時の京都帝国大学文学部考古学研究室とのつながりを想起させる。

山田はなじみの床屋の主人を介して田岡香逸に出会い、田岡が率いる西宮史談会に加わって例会に参加したり、単独行での遺跡踏査、遺物採集を続けた。田岡は山田に「遺跡の調査や遺物の採集にはその時できるだけ精密にして正確な記録を残す必要があり『考古小録』がその好例である」と助言している[田岡 1987]。この「考古小録」は、紅野芳雄が記した「考古小録」3冊のことで、山田はこの助言に応じて自らも同名の「考古小録」7冊を残した。

また、山田が採集した大阪空港 A 遺跡の遺物について佐原真(1932-2002)は、「丹念に整理して今日完璧なかたちで保存している」[佐原 1968 (p.10)]と紹介している。(写真9)

4 西宮市立郷土資料館蔵紅野芳雄収集資料

(1) 資料調査日程等

調査日程

- 2021年4月13日 紅野芳雄収集資料の所在の照会
- 2021年8月24日 紅野芳雄収集資料の調査
- 2022年1月31日 紅野芳雄収集資料の熟覧、写真撮影

調査場所・写真撮影場所及びご対応者名

- 西宮市立郷土資料館(兵庫県西宮市川添町15-26)
- 森下真企氏(西宮市立郷土資料館 学芸員)
- 瀬尾晶太氏(西宮市立郷土資料館 学芸員)
- 藤原亮太氏(西宮市立郷土資料館 学芸員)

調査者

合田茂伸 田中詢弥

(2) 調査資料の概要

紅野芳雄収集資料は、紅野が収集した遺物357点、遺跡踏査・遺物収集・考古学覚書などを日次ぎで記した記録ノート(稿本)「考古小録」(第1冊～第3冊)、「考古図譜」1冊、「考古雑録」1冊から成る。これらに刊本『考古小録』[紅野 1940]1冊、日記3冊を加えた366点は、2010年に「『考古小録』及び関係品」として西宮市有形文化財(考古資料)に指定された。資料は西宮市へ寄贈されて西宮市の所有となり、西宮市立郷土資料館が収蔵している[森下 2017]。本報告書第1部に同館学芸員である瀬尾晶太氏による紅野芳雄と摂津加茂遺跡に関する論文を掲載した。

紅野芳雄(こうの よしお 1893-1938)は、1893年4月1日西宮に生まれ、茨木中学校を卒業後、浪速銀行を経て家業・酒造業の経営にあたり、1938年4月25日に亡くなった。彼が残した「考古小録」3冊には、1908年1月4日から1938年4月20日までの遺跡踏査活動や考古学に関する覚え書きなどが連綿と記録されている。「考古小録」には1915年7月27日から1931年5月2日までの29回におよぶ摂津加茂遺跡の踏査が記録されている。また、遺物357点には摂津加茂遺跡で採集された石器22点が含まれる。

紅野芳雄は、遺跡の踏査や遺物の採集とその記録に情熱を傾けたが、各地の博物館や博覧会の見学、考古博覧会や史料展覧会などへの所蔵品の出品などの活動もさかんにおこなった。1917年に宝

塚新温泉で開かれた宮川（雄逸：筆者補記）氏所蔵加茂遺跡発見石器土器の展覧会、1932年10月1日の本山考古室の見学などにおいて多くの遺物の写生図を残していて、宮川雄逸や、本山彦一との接点を見ることが出来る。また、「考古小録」1918年5月7日の記事に「大阪毎日新聞神戸附録會下山人の「奥多可行」を連載す」と記し、当時すでに好古家として名を馳せていた福原會下山人の連載に関心を寄せている〔西宮市立郷土資料館 1998、合田 2018、2020〕。

刊本『考古小録』の118ページに「写真 勾玉 川西町加茂遺跡出土」として写真が掲載されている。写真には、田岡香逸の手になると思われる次の解説文が添付されている。

此の勾玉は大正初年田澤金吾氏拾得にかゝり同君より大阪辰馬某氏に譲渡されし由にてその後の事情未だ調査の機を得ず、偶々紅野芳雄氏筆寫の圖あり、後の参考のため本書64頁に挿入す。然るに今回刊行に當り辰馬悦蔵氏の校閲を願ひし所、同氏の所蔵に上記の寫眞あり、實物の行方不明の今日、誠に珍重すべき史料と思惟し、乞ふて卷末に附す。〔紅野 1940 (p.118)〕

その解説のとおり『考古小録』64ページには紅野芳雄の勾玉の3面展開図「加茂発見勾玉図」が掲載されている。田澤金吾が採集し所持していた勾玉を実測したことがわかる。この勾玉は、笠井新也が摂津加茂遺跡を踏査し報告した論文にある次の勾玉に該当するものであろう。

12、勾玉 これもたゞ1箇田澤氏の採集に係るものであるが、蓋し遺跡発見以来第1の獲物であらう。長さ1寸1分、幅は頭部で6分、厚さは内側で4分5厘、外側で2分5厘、大体に厚い板形をなしてゐる。石質は軟玉らしいが、磨きが精巧なので一見古墳物にまぎれる位である。併しその孔の状態などから見て、その石器時代物たることは、蓋し疑あるまい。〔笠井 1915b (p.464)〕

「考古小録」に記された紅野芳雄と同好家との交友は、大正から昭和初期における「考古」あるいは「好古」のありかたを伝えている。(写真10)

5 尼崎市立歴史博物館蔵岡崎順二収集資料

(1) 資料調査日程等

調査日程

2021年4月20日 岡崎順二収集資料の所在の照会

2022年2月26日 岡崎順二収集資料の熟覧及び写真撮影

調査場所・写真撮影場所及びご対応者名

尼崎市立歴史博物館（尼崎市南城内10番地-2）

学芸員高梨政大氏

学芸員山上真子氏

調査者

合田茂伸 田中詢弥

(2) 調査資料の概要

岡崎順二（おかざき じゅんじ）の採集した摂津加茂遺跡の遺物が、尼崎市立歴史博物館に収蔵されている。岡崎の遺跡踏査活動や考古学への関心を示す事跡はあきらかではないが、報告書『摂津加茂』の「付載2 尼崎市教育委員会所蔵資料、その他」として、採集遺物の図及び写真が掲載されていて、冒頭に、その経緯が次のように記されている〔富田 1968〕。

尼崎市立、立花中学校生徒であった岡崎順二君は同中学校敷地内の上ノ島遺跡の調査以来、

考古学に関心をもちよく付近の遺跡を訪れるようになった。加茂遺跡への探訪も数次に及んだが、卒業後はすべての採集品を尼崎市教育委員会に寄託し、同委員会の保管するところとなった。今回、採集者岡崎君と尼崎市教育委員会の御好意(ママ)によって、資料を収録することが出来た。土器・石器の実測・整図は同教育委員会の福井英治氏による。記して感謝いたします。

土器(図版76・77、図58) 掲示する土器のうち完形品は、昭和38年9月、第7調査地点の近くの住宅建築現場から採集したものという。

尼崎市立立花中学校校内の上ノ島遺跡の発掘調査は、1959年から1961年までにおこなわれていて、岡崎順二はこの期間に立花中学校に在学していたとみられる。また、摂津加茂遺跡第7調査地点の近くで遺物が採集された時期は1963年で、こののちにすべての採集品が尼崎市教育委員会に託された、と読める。

かつては、中学校・高等学校の校地や近傍で発掘調査がおこなわれるときには、学校地歴部や考古クラブの教員や生徒が発掘調査に参加することがめずらしくなかった。岡崎順二もそうした環境の下で、考古学への関心をもったのではないか。岡崎の通った立花中学校には、かつて上ノ島遺跡の発掘調査を記念した復元竪穴住居が建てられていた。

尼崎市教育委員会が所有し、尼崎市立歴史博物館が収蔵している岡崎順二収集資料は、弥生土器、弥生時代石器、弥生時代から古墳時代までの玉類があり、玉類及び石器の一部は綿敷きのガラス窓付紙箱に展示のためのサインペン書きの小さなラベルとともに収納されている。「加茂遺跡出土/尼崎市教育委員会蔵」と記されたラベルが同封されているので、資料寄贈後、尼崎市教育委員会によって展覧会に出品された状態で保管されているとみられる。確認した遺物は120点で、内容は別表のとおりである。(写真11、写真12、表1)

岡崎順二収集資料は、古墳時代の玉類を含む点に特色がある。それらは、「一括して、第6調査地点の近くで採集している」[富田 1968 (p.164)]とされる。関・関共同発掘調査における第6調査地点は、鴨神社社殿北方、加茂台地の北端附近にあたる。岡崎順二収集資料に含まれる滑石製勾玉、滑石製白玉97点、滑石製小形有孔円板3点などの存在から、古墳時代の集落内の祭祀を伴う遺構や古墳の存在を推定できる。

笠井新也は、摂津加茂遺跡を踏査した報告に遺物の種類別の採集地点を表した「加茂村遺物分布図」を掲載している[笠井 1915b (p.460)]。その分布図では鴨神社社殿の北側やや東寄りの位置に「▲玉片」としてその集中箇所がみられる。笠井は管玉と碧玉「出雲石」の破片及び砥石破片を採集した、と報告した[笠井 1915a (p.461)]ことから、岡野慶隆は玉作工房の存在を推定した[岡野 2006 (p.52)]。

6 兵庫県立考古博物館蔵福原会下山人コレクション

(1) 資料調査日程等

調査日程

2021年10月15日 福原会下山人コレクションの所在の照会

2021年12月1日 福原会下山人コレクションの調査及び写真撮影

調査場所・写真撮影場所及びご対応者名

兵庫県立考古博物館(兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1-1)

菱田淳子氏(兵庫県立考古博物館学芸員)

表1 尼崎市立歴史博物館蔵・岡崎順二収集資料一覧表

(挿図番号及び図版番号は、『摂津加茂』[末永ほか 1968] p.160-p.164 図版第76-図版第79)

点数	紙箱 一括分 :○印	挿図番号	図版番号	種別	大きさ		材質・特徴等	備考
					長、高	幅、口径		
1		図58-1	図版第76-1	土器 弥生土器・甕形土器	高170mm	口径130mm	口縁端部刻目文	第2様式
1		図58-5	図版第76-5	土器 弥生土器・壺形土器	高223mm	最大径176mm	口縁端部円形浮文 頸部・肩部櫛描文(直線文・波状文・斜格子文)・円形浮文	第3-4様式
1		図58-6	図版第76-6	土器 弥生土器・(台付)鉢形土器	高120mm	最大径208mm	口縁端部肥厚 口縁部櫛描文(直線文・波状文) 底部未復元	第3様式
1		図58-8	図版第76-8	土器 高杯形土器	高204mm	口径242mm	口縁部水平拡張 無文 一部接合部はずれ(全3部品再接合可能)	第3様式
1		番外	—	土器 線刻絵画(高床?)壺形土器肩部破片	長90mm	幅108mm	建物屋根 棟飾り有? 経緯不明	
5		土器小計						

1		番外	—	石器 小形太型蛤刃石斧	長140mm	幅65mm	小形 石膏復元 注記あるが経緯不明	
1		図54-6	—	石器 小形太型蛤刃石斧	残長50mm	幅64mm		
1		図56-10	図版第78-10	石器 蛤刃石斧(半製品)	残長130mm	幅70mm		
1	○	図57-10	図版第79-10	石器 磨製石鏃	長27.5mm	幅19.5mm	扁平 凸基有茎式 鏃なし	
1	○	図57-11	図版第79-11	石器 磨製石剣	残長42mm	残幅21.7mm	鉄剣型石剣の鋒片 先端部に摩耗	
1	○	図57-12	図版第79-12	石器 石鎌	長53.6mm	最大幅10mm		
6		石器小計						

1	○	図57-1	図版第79(-1)	玉 ガラス小玉	直径3mm	孔径1.3mm		
1	○	図57-2	図版第79(-2)	玉 ガラス丸玉	直径8mm	孔径2.5mm		
1	○	図57-3	図版第79(-3)	玉 ヒスイ製勾玉	長7.5mm	幅5mm	田能遺跡3例、武庫之荘遺跡1例と同型同大とされる	
1	○	図57-13	図版第79-13	玉 滑石製勾玉	長23.2mm	厚8.7mm		
97	○	図57-4~8	図版第79	玉 白玉一括	直径3mm~5mm	厚1.5mm~3.5mm		古墳時代
1	○	図57-9	図版第79	玉 管玉(小形)	直径2.1mm	長5.7mm	小形	古墳時代
1	○	図57-14	図版第79-14	玉 棒状玉	長26mm	幅(直径)5.1mm	孔なし	
1	○	図57-15	図版第79-15	玉 棒状玉	長29.4mm	直径5.8mm	孔なし	
1	○	図57-16	図版第79-16	玉 棒状玉	長30.4mm	直径7.25mm	孔なし	
1	○	図57-17	図版第79(-17)	玉 有孔円板	長径23.9mm	短径20.3mm	2孔	
1	○	図57-18	図版第79(-18)	玉 有孔円板	残径31mm		2孔	
1	○	—	図版第79(2)	玉 有孔円板	幅15mm	残長17mm	穿孔部で破断	
1	○	図57-19	図版第79-19	玉 貝製有孔円板	長径24.6mm	短径18.1mm	2孔	
109		玉類小計						
120		合計						

調査者

合田茂伸 田中詢弥

(2) 調査資料の概要

調査した資料は、兵庫県立考古博物館に収蔵されている福原会下山人コレクション（考古資料）のうちの摂津加茂遺跡採集資料65点である。目録『福原会下山人コレクション』[水口 1987]には、「No.0149 川辺郡加茂町（川西市）」及び「No.0150 川辺郡加茂村」が掲載されている。調査では、「会下山人0149 A9a006 川辺郡加茂町」及び「会下山人0150 A9a0210 川辺郡加茂村」として収蔵される65点を確認した。（写真13－写真26）

福原会下山人（ふくはら えげさんじん 1870-1949 本名、福原潜次郎）は、篠山藩士福原鉉吉郎の次男として1870年8月22日、丹波国多紀郡篠山町に生まれた。1885年の兵庫県水上郡谷川小学校補助員を振り出しに学校教員として教育に携わりながら、郷土教育の一環として郷土史研究を進めた。「会下山人」は、1897年から居住した神戸市兵庫区石井町が会下山の麓であったことから号したといい、このころから各地の遺跡を踏査して遺物を採集してゐる。また、遺跡の調査とともに、『西撰大観』をはじめとする郡・村誌、地域史を執筆、編纂する一方、1905年、委員長として神戸史談会を設立し、兵庫県における郷土史研究を牽引した。1945年郷里篠山に疎開、1949年に80歳で亡くなった [朽木 1985] [水口 1987]。

会下山人が収集した資料の大部分は、その晩年、散逸を防ぐためにコレクターとして著名な池長孟（1891-1955）のもとで一括して保管されたのち、1980年に「福原会下山人コレクション」として兵庫県教育委員会に寄贈、1983年に開館した兵庫県立歴史博物館に収蔵された。資料は膨大で、考古資料4471点のほか、歴史資料、工芸資料、生物・鉱物資料などをあわせて5436点を数える [朽木 1985] [水口 1987]。そのうちの考古資料は、2007年に開館した兵庫県立考古博物館に移管された。また、会下山人が収集した資料の一部は、長福寺考古資料館（神戸市西区）に収蔵されている [朽木 1985]。

現兵庫県立考古博物館所蔵の「福原会下山人コレクション」に含まれる考古資料は4471点で、そのうち摂津加茂遺跡資料の点数は一つの遺跡あたりとしては3番目に多い。もっとも多くの遺物を収集した遺跡は大阪府国府遺跡（資料数1413点）である。国府遺跡の発掘調査をおこなった本山彦一は、「主として神戸の福原潜次郎氏の懇意指導に俟ったものが多い」[本山 1935]と記し、摂津加茂遺跡を最初に報告した笠井新也は会下山人を「福原将軍」と言った [笠井 1915]。それらは、会下山人の遺物収集家としての活動を物語っている。

7 明石市立文化博物館蔵真野修氏収集資料

(1) 資料調査日程等

調査日程

2023年10月11日 真野修氏収集資料の所在の照会

2023年10月25日 真野修氏収集資料の調査及び写真撮影

調査場所・写真撮影場所及びご対応者名

明石市立文化博物館（明石市上ノ丸2丁目13番1号）

稲原昭嘉氏（明石市文化・スポーツ室）

調査者

合田茂伸

(2) 調査資料の概要

資料は、明石市立文化博物館に常設展示されている。摂津加茂遺跡出土の緑泥片岩製石庖丁破片1点である。明石市立文化博物館開館時に、弥生時代の通史展示に適う資料の一つとして真野修氏より所蔵品の提供を受けた。同博物館に保管されている真野修氏採集資料、関係資料はこの石庖丁の破片1点である。真野修氏が採集した資料の全貌は不明である。(写真27、28 原品は明石市立文化博物館蔵)

8 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料

(1) 資料調査日程等

調査日程

2023年10月27日 京都大学総合博物館所蔵摂津加茂遺跡出土資料の所在の照会

2024年1月16日 京都大学総合博物館所蔵摂津加茂遺跡出土資料の熟覧及び写真撮影

調査場所・写真撮影場所及びご対応者名

京都大学総合博物館（京都市左京区吉田本町）

准教授 村上由美子氏

研究員 坂川幸祐氏

調査者

合田茂伸 今井真由美

(2) 調査資料の概要

『京都大学文学部考古学資料目録 第1部』には、「目録番号004、受入番号1482 弥生式土器破片 約20個 1917年田沢金吾寄贈」を先頭に13件の兵庫県川西市加茂出土遺物が登録されている〔横山・佐原 1960 (pp.229-234)〕。これらは、現在の京都大学総合博物館の学術標本として収蔵、保管されている。京都大学総合博物館の許可を得て当該資料の確認を行った。資料確認時に、『京都大学文学部考古学資料目録 第1部』掲載外の摂津加茂遺跡出土資料について教示があり、あわせて確認、調査を行った。確認した摂津加茂遺跡出土遺物（採集、収集品）は別表のとおりである。(表2、写真29-写真72)

『目録』に掲げられている採集者（寄贈者）の略歴を目録記載順に記しておく。

①田沢金吾（たざわ きんご 田澤金吾とも）（1892年1月12日-1952年9月26日）

文化財専門審議会工芸品部、考古民俗資料部会専門委員田沢金吾は、9月26日没した。享年59。1892年1月12日兵庫県西宮市に生れ、兵庫県立工業学校を経て早稲田大学理工学科に入学、1913年まで在学して退いた。1917頃から考古学の研究に志し、1918年以来、和歌山県、内務省、東京帝国大学、文部省、国立博物館等の嘱託として史蹟名勝、重要美術品の調査に従事した。1949年文部技官に任ぜられ、国立博物館調査課に勤務し、1949年文化財保護委員会事務局の保存部美術工芸品課に転じ、1952年退官した。1950年文化財専門審議会専門委員となつた。著書に「楽浪」「鞍馬山経塚遺宝」「薩摩焼の研究」などがある。（「田沢金吾 日本美術年鑑所載物故者記事」（東京文化財研究所）<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8943.html>（閲覧日 2024-01-31））

田沢金吾は、本山彦一（本山彦一蒐集資料に田沢が収集した遺物が含まれている〔紅野 1940 p.82〕）、濱田耕作〔濱田 1918、1920〕、鳥居龍蔵〔石井 2020 p.142〕らと交流している。紅野

表2 京都大学総合博物館蔵・摂津加茂遺跡出土資料一覧表

(番号・品名等は、[横山・佐原 1960] による。)

目録番号	品名	数量	[登録番号]	記述	写真の有無	20240116 撮影時記録	同左 個数	本報告書 写真番号	
004	弥生式土器 破片	約20個	1482	主として唐古第3様式。1917年 田沢 金吾寄贈		確認数：弥生土器 破片57個	57	写真29 - 写真36	
005	弥生式土器 破片	約70個	4342	唐古第3・第4様式を中心とし、第2・第5 様式を若干含んでいる。櫛描文・凹線 文・円形浮文等で華麗に飾られたもの が多い。藤沢一夫採集 1942年購入	写真あり005- 1, 005-2	確認数：弥生土器 破片52個	55	写真37 - 写真42	
006	弥生式土器 破片	2個	4604	1945年 坪井清足寄贈		確認数：弥生土器 破片2個	2	写真43、写真44	
007	石鏃	6個	1482	サヌカイト製。和製。三角形・柳葉形 各1個有茎式4個。1917年 田沢金吾寄 贈	写真あり007	確認数：石鏃5個 (目録写真と一部 異なる。受入番号 010と同梱)	5	写真45、写真46	
010	石鏃	4個	3342	サヌカイト製。粗製。三角形・柳葉形 および有茎式に近いもの。1927年 水 野清一採集		確認数：3個 (受 入番号012及び007 (写真下段左)と 同梱)	3	写真53、写真54	
012	石鏃破片	2個	3342	サヌカイト製。1927年 水野清一採集	写真あり012	未確認	0	—	
013	石鏃	2個	1482	サヌカイト製。細長くてつまみはない。 1917年 田沢金吾寄贈	写真あり013	確認数：石鏃2箇 (受入番号010と同 梱)	2	写真53、写真54	
008	石鏃	10個	1599	サヌカイト製。粗製。三角形・柳葉形 など。1917年 羽田亨寄贈	写真あり008	確認数：石鏃10個	10	写真47、写真48	
009	石鏃	1個	3322	サヌカイト製。三角形。上羽貞幸収集 1928年購入		確認数：石鏃1個 ※別に包み紙 (摂 津國加茂村石鏃 谷川氏ヨリ到来 3322)	1	写真49、写真50	
011	石鏃破片	1個	3915	サヌカイト製。1927年 塚本益男寄贈		確認数：石鏃1個	1	写真51、写真52	
014	磨製石斧破 片	1個	4685	小形の柱状片刃石斧。頭部欠。1944年 山田博雄寄贈	写真あり014	確認数：石鏃1個	1	写真57、写真58	
015	磨製石斧破 片	1個	4634	小形の扁平片刃石斧。粘板岩製。頭部 欠。1947年 横山浩一採集	写真あり015	確認数：磨製石器 破片1個 (鑿状扁 平片刃石斧か)	1	写真59、写真60	
016	土製紡錘車	1個	4342	弥生式土器片を利用。打製。藤沢一夫 採集 1942年購入	写真あり016	確認数：土製紡錘 車1個	1	写真61、写真62	
—	石器類	伝来未確認分					確認数：石鏃2個、 石鏃2個	4	写真45、写真46、 写真55、写真56
([考古学資料目録I] [横山・佐原 1960] 外)			5240~5245	(兵庫県川西市加茂。石器類 藤沢一夫氏) 5242欠					
			5240	磨製石器破片 (1点)			1	写真63、写真64	
			5241	石庖丁破片 (1点)			1	写真65、写真66	
			5243	石鏃破片 (1点)			1	写真67、写真68	
			5244	石槍破片 (1点)			1	写真69、写真70	
			5245	用途不明石器 (5点)			5	写真71、写真72	
						合計	152		

芳雄は「考古小録」に、田沢から石器を購入したこと、西宮の遺跡を共に踏査したこと、田沢が所持する遺物を紅野が所有する本箱と交換したことなどを記しており、西宮での田沢の活動を知ることができる [合田 2020 pp.133-135]

②藤澤一夫 (ふじさわ かずお) (1912年10月11日 -2003年11月3日)

本項については、『藤澤一夫先生 追悼録』[水野 2012]、『瓦仙人の世界—考古学者 藤澤一夫コレクションから—』[狭川 2019] を参照した。また、(公財)元興寺文化財研究所の山田哲也氏には資料探索にご高配いただいた。お名前を記して感謝の意とする。

藤澤一夫は、父藤澤喜七郎、母咲の長男として岡山県浅口郡黒崎村（現倉敷市）に生まれた。大阪桜橋を経て1922年豊能郡豊中村（現豊中市）に転居。自宅は現在の新免遺跡の場所にあたり桜塚古墳群に近かったことから遺物の採集に熱中したようである。また、通学した豊中中学では教師に恵まれ、学問の原点になったと回顧している。

中学卒業後、愛知國學院専攻科に進学。卒業ののち高知県の土佐神社に出仕した。1939年関西大学専門部英語科入学。その後、直良信夫（1902-1985）、小林行雄（1911-1989）、森本六爾（1903-1936）、坪井良平（1897-1984）らと交わった。このことが、後年、『彌生式土器聚成圖録 正編』に近畿地方、東海地方の土器の実測図が多数掲載されていることにつながっていったのであろう。よく知られることであるが、東京考古学会が主体となって造立した森本六爾夫妻の墓塔の塔形、種子の選擇は藤澤一夫である〔水野 2012〕。その後、京都帝国大学梅原末治（1893-1983）の薫陶を受けた。1941年、梅原から朝鮮古蹟囑託の誘いがあり、これを快諾。梅原末治は朝鮮行きに際して、藤澤一夫に朝鮮への渡航費用を用立てている。『『これまで採集した遺物をもってきなさい』といわれ、もっていった遺物をポケットマネーで1個1円で買い取られ一夫に渡航費用を渡したのである。その遺物は現在京都大学に入っているのではと思われる。』という〔藤澤 2012 p.8〕。朝鮮では、総督府博物館京城本館に勤務し、扶余に派遣された。

1946年、大阪府重要美術品等調査囑託に任じられた後、大阪府教育民生部社会教育課に勤務した。このときに大阪府下の文化財調査をおこない、また、四天王寺、新堂廢寺、高宮廢寺、飛鳥寺、川原寺などの発掘調査に携わった。1948年日本考古学協会設立とともに委員となった。

1969年に堅田直（1927-2006）が帝塚山大学に招請、1973年に四天王寺女子大学（現、四天王寺国際仏教大学）に移った。1951年に大阪府教育委員会から社会教育功労者表彰、1970年に文化庁長官表彰、1983年大阪文化賞、1993年勲五等の叙勲を受けた。2003年11月3日死去。91歳。

藤澤一夫が採集した膨大な資料は写真、拓本などの記録類とともに（公財）元興寺文化財研究所に移された。藤澤が採集した遺物の日付で最も古いものは1930年6月の金寺山廢寺の遺物であるという。また、摂津加茂遺跡に近い栄根廢寺の瓦が含まれており〔狭川 2019〕、付近を踏査したことをうかがえる。

現在、京都大学総合博物館が伝蔵している藤澤一夫採集になる摂津加茂遺跡の遺物の受入年及び受入経路が「藤澤一夫採集 1942年購入」（目録番号：005、016、登録番号：4342）〔横山・佐原 1960〕であるのは、朝鮮への渡航費用支出のために買い取った遺物であるからであろう。

③坪井清足（つばい きよたり）（1921年11月26日-2016年5月7日）

1921年11月26日、大阪府大阪市に生まれ、その後は東京都で育つ。父は実業家の傍ら在野の考古学者として梵鐘研究を開拓した坪井良平。41年に京都大学文学部に入学。43年に学徒動員により兵役に従事し、台湾に送られた。台湾では台北帝国大学医学部の人類学者である金関丈夫と交流を持った他、鳳鼻頭遺跡近くの陣地に派遣された折には、壕の壁面の上層に黒陶（新石器時代後半期）、下層に彩陶（新石器時代前半期）が包含されていることを確認し、戦陣にあっても考古学研究から離れることはなかった。

46年に京都大学復学。49年に京都大学大学院進学。平安中学校・平安高等学校教諭などを経て、55年に京都国立博物館に採用。同年、奈良国立文化財研究所に転出。それ以降、65～67年に文化財保護委員会（現、文化庁）への出向、75～77年に文化庁文化財保護部文化財鑑査官の任を務めた時

期を除くと、77年の奈良国立文化財研究所所長就任を経て、86年の所長任期満了退職に至るまで、奈良国立文化財研究所を拠点として考古学研究の推進と埋蔵文化財行政の確立に邁進した。退職後は、86年に財団法人大阪文化財センター理事長就任、2000年に財団法人元興寺文化財研究所所長就任を経て、13年以降は公益財団法人元興寺文化財研究所顧問を務めた。

役職としては、文化財保護審議会第三専門調査会長、学術審議会専門委員、宮内庁陵墓管理委員、日本ユネスコ国内委員会委員などを歴任した。叙勲等は、91年に勲三等旭日中綬章、99年に文化功労者に叙せられ、死後、従四位に叙位された。受賞歴としては、83年に日本放送協会放送文化賞、90年に大阪文化賞、91年に朝日賞を受賞している。

本項は次の文献に拠った。「坪井清足 日本美術年鑑所載物故者記事」(東京文化財研究所) <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/818736.html> (閲覧日 2024-01-31)

④羽田亨 (はねだ とおる) (1882年5月15日 - 1955年4月13日)

元京都大学総長、京都大学名誉教授、文学博士。京都府に生れ、明治40年東京帝国大学文科大学を卒業した。同42年京都大学文学部講師となり、大正12年文学博士の学位を得、同13年教授に進んだ。昭和13年から同20年まで第10代京都大学総長に在任、同21年同学名誉教授となった。28年東洋史の研究の功績によつて文化勲章を受け、29年には京都名誉市民に推された。また支那学研究に対し、27年フランス、アカデミーからジユリアン章、30年1月フランス政府からレジオン・ド・ヌール勲章を授与された。著書には「西域文明史概論」「西域文化史」などがあり、晩年には開国百年記念会々長として明治文化史、日米文化交渉史の編纂を主宰していた。

本項は、次の文献に拠った。「羽田亨 日本美術年鑑所載物故者記事」(東京文化財研究所) <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8948.html> (閲覧日 2024-01-31)

⑤上羽貞幸 (かみは さだゆき) (1866年2月10日 - 1937年2月)

1866年2月10日東京麻布白金三光町に生まれ、参謀本部陸地測量部整図課に勤務。1937年2月に逝去した。

上羽貞幸は、東京人類學會ほか東京考古学会、史前学界、集古会などの学会、グループに加わって、関東地方を中心とした遺跡の踏査、発掘を行って遺物を収集した。『東京人類学雑誌』、『人類学雑誌』から上羽貞幸の収集活動の一端を知ることができる。

- 1910年2月 東京人類學會に入会

「入会者 / 府下豊多摩郡内藤新宿番衆町1 / 上羽貞幸君 / 右紹介者 江見忠切君」[東京人類學會 1910-2]

- 1910年3月12日、13日 東京人類學會・石器時代土偶研究展覧会に採集遺物を出品

「去る1213日の両日午後1時より4時まで、人類学教室講義室に於て、本会会員等の展観に供せり。」この展覧会上羽貞幸は土偶4点を出品した [東京人類學會 1910-3]。

- 1910年4月 3月の展覧会に出品した遺物の一部が口絵で紹介されている。「挿図 石器時代土偶及び土板 (10) 上羽君所蔵」[東京人類學會 1910-4]

など枚挙にいとまがない。その後、1915年11月17日には、東京人類學會会員による加曾利貝塚の「遠足会」すなわち発掘に参加し [東京人類學會 1915-11]、上羽貞幸はその首尾を記している [上羽 1915]。1920年に、東京都北区西ヶ原貝塚で撮影された写真がある。そこには、上羽貞幸と共に、

山内清男（1902-1970）、八幡一郎（1902-1987）が写っている [高坂 2022]。

上羽貞幸が収集し、「石器時代土偶研究展覧会陳列品の一部（二）」に「(10) 上羽君所蔵」[東京人類學會 1910-4]と記されている土偶は、現在は東京国立博物館所蔵「山形土偶残片」（機関管理番号J-9479 東京都大田区田園調布本町 下沼部貝塚出土）として登録されている。このほか、国立文化財機構所蔵品統合検索システムでは、東京国立博物館が所蔵している上羽貞幸寄贈の考古学資料を5点抽出できる (<https://colbase/nich.go.jp/>)。また、東京大学総合研究博物館のデータベース/人類先史のカテゴリには、加曾利貝塚人骨標本に上羽貞幸が発掘調査者として記録されている標本が含まれている (https://www.um.u-tokyo.ac.jp/web_museum/database.html)。

上羽貞幸が採集し京都大学に売却した摂津加茂遺跡出土の石鏃1点からは、上羽の採集活動の広さを知ることができる。

本項はおもに、杉山博久が著わした『魔道に魅せられた男たち』[杉山 1999]及び板橋区立郷土資料館・守屋幸一の編集・著作になる『明治・大正期の人類学・考古学者伝』[板橋区立郷土資料館・守屋 2011]を参照した。とくに『明治・大正期の人類学・考古学者伝』は、「上羽」の読みについて「カミハ」と自署があることを指摘している。

⑥水野清一（みずの せいいち）（1905年3月24日-1971年5月25日）

文学博士。水野清一は、1905年3月24日神戸市に生れた。1928年京都大学文学部史学科卒業。4年4月より6年まで北京留学。1931年1月京都市東方文化研究所研究員。同所員として1936年ごろから1945年まで中国の竜門石窟、大同、雲崗の発掘調査に従事した。1948年京都大学人文科学研究所教授。1951年雲崗石窟の研究で朝日賞、1952年同研究で学士院恩賜賞を受賞。「仏教芸術」編集委員。1968年京都大学停年退職。「響堂山石窟—河北河南省境における北齊時代の石窟寺院」（長広敏雄共著、京都、東方文化学院京都研究所 1937年）、「竜門石窟の研究」（長広敏雄共著 京都、東方文化学院京都研究所 1941年）、「雲崗石窟—西暦五世紀における中国北部仏教窟院の考古学的調査報告、東方文化研究所調査、1940年-1945年、」（長広敏雄共著、京都、京都大学人文科学研究所 1951-1955年）など編著書論文の数は多い。詳しくは退官記念論文集「中国の仏教美術」（平凡社、43年）参照。

本項は次の文献に拠った。

「水野清一 日本美術年鑑所載物故者記事」（東京文化財研究所）<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9482.html>（閲覧日 2024-01-31）

⑦山田博雄（やまだ ひろお）（1899年-没年不明）

山田博雄について、とくに摂津加茂遺跡との関係については本書第1部に掲載した青木政幸氏論文に詳しい。

山田博雄は、1899年、山口県に生まれた。1929年に兵庫県土木部、1937年から1939年まで大阪第二飛行場建築事務所、1972年から辰馬考古資料館設立準備室勤務に勤務し、1977年同館を退職した。

山田博雄の採集活動は、飛行場工事現場の大阪空港 A 遺跡で遺物採集をはじめたころからさかんになった。踏査の範囲はしだいに広がり、彼がつづった「考古小録」7冊（1937年-1951年）に記された踏査遺跡は、38遺跡に及んだ。採集遺物の多くは、辰馬考古資料館（1975年設立）で保存されている。同館の『山田博雄収集資料目録』に登載された遺物2678点（踏査回数2百回余）のう

ち、摂津加茂遺跡の採集資料は748点、踏査回数は63回で、他の遺跡を圧倒している。

山田はなじみの床屋の主人を介して田岡香逸（1905年-1992年）に出会い、田岡が率いる西宮史談会に加わって例会に参加したり、単独行での遺跡踏査、遺物採集を続けた。田岡は山田に「遺跡の調査や遺物の採集にはその時できるだけ精密にして正確な記録を残す必要があり『考古小録』がその好例である」と助言している。この「考古小録」は、紅野芳雄が記した「考古小録」3冊のことで、山田はこの助言に応じて自らも同名の「考古小録」7冊を残した。

また、山田が採集した大阪空港 A 遺跡の遺物について佐原真は、「丹念に整理して今日完璧な状態で保存している」と紹介している [佐原 1968 p.10]。

本項は、辰馬考古資料館編集になる『山田博雄収集資料目録』[財団法人辰馬考古資料館 1987]に拠った。

⑧横山浩一（よこやま・こういち）（1926年2月18日-2005年4月7日）

横山浩一は、1926年、大阪府に生まれた。1948年、京都帝国大学文学部史学科卒業後、京都大学助手、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長・同埋蔵文化財センター長を経て、1977年に九州大学教授に就任した。

1992年より福岡市博物館館長、のち同館顧問となった。九州大学名誉教授。

1992年から1996年まで日本考古学協会会長の席にあった。

瑞宝中綬章を受章。主な編著に『岩波講座 日本考古学』全9巻（岩波書店）、『日本美術全集I 原始の造形』（講談社）、『日本考古学論集 4』（吉川弘文館）、『古代技術史攷』（岩波書店）などがある。

（*塚本益男については、経歴を探索できなかった。大方のご教示を賜りたい。）

9 大阪歴史博物館蔵清海慶治収集資料

（1）資料調査日程等

調査日程

2023年10月30日 大阪歴史博物館蔵清海慶治資料の所在の照会

2023年11月29日 大阪歴史博物館蔵清海慶治資料の熟覧及び写真撮影

調査場所・写真撮影場所及びご対応者名

大阪歴史博物館（大阪府中央区大手前4-1-32）

学芸員 加藤俊吾氏

学芸員 安岡早穂氏

調査者

合田茂伸 今井真由美

（2）調査資料の概要

報告書『摂津加茂』「附載2」には、先に掲げた尼崎市立歴史博物館が所蔵する岡崎順二採集資料、今北三郎氏所蔵資料が見出しを伴って掲載されている。その文中及び挿図説明には、「宮川石器館所蔵」、「田岡孝逸氏所蔵」、「山田博雄氏所蔵」、「大阪市立博物館蔵」、「芦屋市教育委員会、藤川祐作氏蔵」、「大阪城天守閣蔵」が紹介されている。このうち、宮川石器館所蔵銅鏃は同館、山田博雄

氏採集銅鏃・石剣については公益財団法人辰馬考古資料館が所蔵している。大阪城天守閣所蔵資料は、『彌生式土器蒐成圖録』の「K26林田良平所蔵・藤澤一夫実測」、「K71吉田音次郎所蔵・藤澤一夫実測」、「K72吉田音次郎所蔵・藤澤一夫実測」が該当する〔森本・小林 1938 (K26、K71、K72)〕。資料の現状は未確認である。「田岡孝逸氏所蔵」、「芦屋市教育委員会、藤川祐作氏所蔵」とされる資料は、所在を確認できなかった。

報告書「附載2」のうち「大阪市立博物館蔵」とされる資料には、採集者、旧蔵者などの記載がない。この資料について、大阪歴史博物館に探索を依頼したところ、清海慶治資料が該当するということが判明した。当該資料を確認した内訳は別表のとおりである。『報告書』165ページの上2段の「大阪市立博物館蔵」は該当資料を確認していないが、166ページの石器の大部分は現在、大阪歴史博物館に伝蔵され、『報告書』掲載写真以外にも多数の石器が保管されていた。大阪歴史博物館において確認した「清海慶治収集川西市加茂遺跡出土資料」は897点であった。『報告書』166ページ写真第1段～第2段4葉の石鏃及び石錐は、大阪歴史博物館伝蔵資料では、ボール紙台紙に糸で固定された石器台紙4枚分389点が該当する。『報告書』掲載写真の石器の配列は、現状で台紙に固定されている石器のそれと同じである。第3段の石庖丁、石錐及び柱状片刃石斧は遊離して保管されていて、全31点の実物を確認した。その他台紙に固定されることなく袋や小箱に収納されている遊離した遺物は477点伝蔵されていることを確認した(表3、写真73-写真91)。

調査当初、清海慶治資料についての伝来の経緯や旧所蔵者と目される清海慶治の人物に関する情報は不詳であったが、北摂の遺跡で採集された石器を福島義一が紹介した論文に「摂津国川辺郡川西町加茂・燧石未完石器(磨痕アリ本文参照)、燧石完成石鏃(逆刺式)2個」の注として「註5 堺市清海慶治氏採集品」と記されている〔福島 1933 (pp.158-164)〕ことから、堺に在住した収集家清海慶治(きよみ けいじ)であろうと推定した。堺市博物館に情報提供をもとめたところ、

1) 清海慶治は、堺の郷土史家・前田長三郎の弟であること。

また、清海慶治の兄・前田長三郎については、

2) 前田長三郎は堺市や東京国立博物館などに考古資料を寄贈していることで知られるが、堺市博物館には遺物採集記録は伝存していないこと。

という教示を得た。このことについては、堺市博物館の白神典之氏、十河良和氏、海邊博史氏を煩わせた。お名前を記して感謝の意とする。さらに、前田長三郎に関する文献をあたると、

3) 前田長三郎は図書を執筆、出版したこと(『説教筆記』〈1877〉、『堺縣縣会議傍聴日誌』〈1880〉、『堺県官民必携』〈1880〉、『大和売薬史』〈1933〉など)。

4) 奈良日報社社長をつとめたこと〔武知 1995〕。

5) 堺大町の紙卸商前田長三郎・活版所前田支店として名が残っていること〔川崎 1883〕。

6) 四ツ池遺跡出土弥生土器を紹介していること(『泉州四ツ池遺跡出土石器時代弥生式土器』〈1932〉)。

などが判明した。大阪歴史博物館が所蔵する清海慶治資料(遺物)には、大阪市遠里小野遺跡出土の漁撈用具も含まれており〔安岡 2023〕、兄前田長三郎と共に近畿地方各地の遺跡を踏査し遺物を収集したのではないかと推定する。

表3 大阪歴史博物館蔵・清海慶治収集摂津加茂遺跡出土資料一覧表

(番号は本表番号。収納分類・注記番号等は大阪歴史博物館収蔵状況。)

番号	収納大分類	収納小分類	点数	注記番号等	本報告書写真番号
1	(1) 台紙固定資料 (3356～3744)	台紙1「加茂」(3356～3446)	91	・考古 3356～3446 川西市加茂遺跡出土 石鏃(91点)のうち 清海慶治 1264 1	写真73、写真74
2		台紙2「加茂」(3447～3546)	103	・考古 3447～3549 川西市加茂遺跡出土 石鏃(103点)のうち 清海慶治 1264 2	写真75、写真76
3		台紙3「兵庫縣川辺郡川西村加茂」(3550～3643)	94	・考古 3550～3643 川西市加茂遺跡出土 石鏃(94点)のうち 清海慶治 1264 3	写真77、写真78
4		台紙4「加茂」(3644～3744)	101	・考古 3644～3744 川西市加茂遺跡出土 石鏃・石錐(101点)のうち 清海慶治 1264 4	写真79、写真80
		(小計)	389		
5	(2) プラスティック小箱収納資料 (3745～3775 <3774の誤記か>、 4276)	箱1 (3745～3769) <3774の誤記か>	25	・考古 3745-3760 川西市加茂遺跡出土石庖丁(16点) 25-5-16 紙メモ「M5(または)川5」紙ラベル「石庖丁」遺物注記:キ-1955、キ-1956、キ-1957、キ-1958、キ-1959、キ-1960、キ 1961、キ-1962、キ-1963、キ-1964、キ-1965、キ-1966、キ-1967、キ-1968、キ-1969、キ-1970	写真81
6				・考古 3761 川西市加茂遺跡出土 「有孔円板」(1点) 25-6 遺物注記:キ-1971	写真82
7				・考古 3762-3768 川西市加茂遺跡出土 石錘(7点) 25-7-7 遺物注記:キ-1972、キ-1973、キ-1974、キ-1975、キ-1976、キ-1978 (1977の誤記か)、キ-1978	写真83
8				・考古 3769 川西市加茂遺跡出土 磨製石斧 ※破片(1点(8細片)) 25-8 遺物注記:キ-1979	写真84
9		箱2 (3770～3775) <3774の誤記か>	6	・考古 3770～3775 <3774の誤記か> 川西市加茂遺跡出土 石槍片(5点) 25-9-5 遺物注記:キ-1980、キ-1981、キ-1982、キ-1983、キ-1984	写真85
10				考古 4276 川西市加茂遺跡出土 磨製鑿形石斧(1点) 25-12 遺物注記:キ2486 ラベル(小形小判型)加茂ノカモ	写真86
	(小計)	31			
11	(3) 袋入り	袋1 (3775～3816 <キ1985～キ2026>)	42	・考古 3775～3816 川西市加茂遺跡出土 石鏃(42点) 25-10-42 (紙メモ「25の10 キ1985～2026」) 遺物注記*キ1985、キ1986、キ1987、キ-1988、キ-1989、キ1990、キ1991、キ1992、キ1993、キ1994、キ1995、キ1996、キ1997、キ1998、キ1999、キ2000、キ2001、キ2002、キ2003、キ2004、——(キ2005のウラ?)、キ2006、キ2007、キ2008、キ2009、キ2010、キ2011、キ2012、キ2013、キ2014、キ2015、キ2016、キ2017、キ2018、キ2019、キ2020、キ2021、キ2022、キ2023、キ2024、キ2025、キ2026	写真87
12		袋2 (キ2027～キ2064)	38	(ラベルなし 川西市加茂遺跡出土 石鏃・石錐 38点) ・遺物注記:キ2027、キ2028、キ2029、キ2030、キ2031、キ2032、キ2033、キ2034、キ2035、キ2036、キ2037、キ2038、キ2039、キ2040、キ2041、キ2042、キ2043、キ2044、キ2045、キ2046、キ2047、キ2048、キ2049、キ2050、キ2051、キ2052、キ2053、キ2054、キ2055、キ2056、キ2057、キ2058、キ2059、キ2060、キ2061、キ2062、キ2063、キ2064	写真88
13		袋3 (キ2443～キ2450)	8	・紙メモ「ナイフ型石器 キ2443～2450」(8点) 遺物注記:キ2443、キ2444、キ2445、キ2446、キ2447、キ2448、キ2449、キ2450	写真89
14		袋4 (キ2027～キ2486)	3	・紙メモ「25の11 石鏃(大)2027～2064(小)2065～2442 キカモ9個 ナイフキ2443～2450 石錐キ2451～2486」石鏃3点 遺物注記:キカモ	写真90
15		袋5 (キ2065～キ2442、キ・カモ9点)	386	・紙メモ「25の11 石鏃(小)キ2065～2442 キ・カモ9個」石鏃・石錐等386点(※黒曜石剥片1点含む) 遺物注記:キ2065～キ2442、キカ・モ	写真91
	(小計)	477			
	合計	897			

【参考文献】

- 川崎源太郎 1883 「紙卸商 大町 前田長三郎／大町活版所／前田支店」『住吉・堺豪商案内記』 p.167 (堺市立図書館地域資料デジタルアーカイブ
https://e-library.gprime.jp/lib_city_sakai/da/detail?tilcod=0000000013-S0010766)
- 東京人類學會 1910-2 「東京人類學會記事 ○入会者」『東京人類学雑誌』第25卷(第287号) pp.205-206
- 東京人類學會 1910-3 「石器時代土偶研究展覧会」『東京人類学雑誌』第25卷(第288号) pp.239-243
- 東京人類學會 1910-4 「挿図 石器時代土偶及び土版」『東京人類学雑誌』第25卷(第289号) 口絵
- 東京人類學會 1915-11 「東京人類學會遠足會」『人類学雑誌』第30卷第11号 pp.432-433
- 上羽貞幸 1915-11 「東京人類學會遠足會」『人類学雑誌』第30卷第11号 pp.432-433
- 笠井新也 1915a 「玉類・斎瓶及び弥生式土器を混出せる石器時代の遺跡(1)」『人類学雑誌』30-11 東京人類學會 pp.408-417
- 笠井新也 1915b 「玉類・斎瓶及び弥生式土器を混出せる石器時代の遺跡(2)」『人類学雑誌』30-12 東京人類學會 pp.459-498
- 笠井新也 1916 「玉類・斎瓶及び弥生式土器を混出せる石器時代の遺跡(3)」『人類学雑誌』31-1 東京人類學會 pp.22-26
- 笠井新也 1916 「玉類・斎瓶及び弥生式土器を混出せる石器時代の遺跡(4)」『人類学雑誌』31-2 東京人類學會 pp.59-65
- 濱田耕作 1918 「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2冊 京都帝国大学 p.1
- 濱田耕作・辰馬悦蔵 1920 「河内国府石器時代遺跡第二回発掘調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第4冊 序言
- 樋口清之 1926 「大和発見の特殊石庖丁と石錐用石鏃について」『人類学雑誌』41-10 東京人類學會 pp.492-498
- 梅原末治 1927 「栄根銅鐸」『銅鐸の研究 資料編』大岡山書店 pp.63-68
- 直良信夫 1929 「石器其他を出土せる日本上代の遺蹟と銅鐸の關係」『考古学雑誌』19-8 考古學會 pp.501-515
- 福島義一 1933 「摂津国川辺郡加茂遺跡採集の一磨製石鏃」『人類学雑誌』48-2 東京人類學會 pp.105-107
- 福島義一 1933 「摂北先史遺跡採集石器の二三に就いて」『考古学』4-6 考古學會 pp.158-164
- 小林行雄 1935 「加茂彌生遺蹟の貝輪」『考古学』6-9 東京考古學會 p.426
- 濱田耕作 1935 「序言」『富民協會農業博物館本山考古室要録』本山人家蔵版・岡書院
- 本山彦一 1935 「學術的興味と価値」(大正6年10月河内国府石器時代遺跡発掘直後大阪毎日新聞掲載)『富民協會農業博物館本山考古室要録』本山人家蔵版・岡書院 卷頭 本山松陰翁記文 pp.6-7
- 末永雅雄 1935 「290 石錐石鏃」、「908 石鏃石錐石屑」『富民協會農業博物館本山考古室要録』本山人家蔵版・岡書院 p.32、p.96
- 朝日新聞社 1936 「『宮川石器館』開く」『朝日新聞』大阪 朝刊 p.13 (朝日新聞社「聞蔵IIビジュアル」2021.12.7閲覧)
- 森本六爾・小林行雄 1938 『彌生式土器聚成圖録 正編』(東京考古學會報 第1冊)第14図23、PL22 (k26)、PL24 (K71、K72) 坪井良平 東京考古學會
- 紅野芳雄 1940 『紅野芳雄遺著 考古小録』西宮史談会
- 吉井良尚 1940 「序」『紅野芳雄遺著 考古小録』西宮史談会
- 辰馬悦蔵 1940 「跋」『紅野芳雄遺著 考古小録』西宮史談会
- 直良信夫 1943 「銅鐸と石器伴出銅鏃との關係—摂津加茂発見の銅鏃—」『近畿古文化叢考』葦牙書房 pp.14-22
- 藤森栄一 1943 「彌生式文化に於ける攝津加茂の石器群の意義に就いて」『古代文化』14-7 日本古代文化学会 pp.217-250
- 末永雅雄 1957 「兵庫県川西市加茂遺跡」『日本考古学年報』5 (昭和27年度) 日本考古学協会 誠文堂新光社 p.67
- 末永雅雄 1958 「兵庫県川西市加茂遺跡」『日本考古学年報』7 (昭和29年度) 日本考古学協会 誠文堂新光社 pp.100-101

- 神戸新聞社会部 1959 「加茂遺跡は重工業地帯」『祖先のあしあと』II のじぎく文庫 pp.118-128
- 小林行雄 1959 「加茂遺跡(2)」『図解考古学辞典』水野精一・小林行雄(編) 東京創元社 p.185
- 横山浩一・佐原真 1960 「川西市加茂」『京都大学考古学資料目録』(京都大学文学部博物館考古学資料目録〈第1部〉日本先史時代) 京都大学 pp.229-230
- 武藤誠 1962 「加茂遺跡」『日本考古学辞典』藤田亮策(監修) 日本考古学協会編 東京堂 p.111
- 末永雅雄・富田好久・亥野彊・石野博信 1968 『関西大学文学部考古学研究第3冊 摂津加茂』関西大学
- 富田好久 1968 「付載2 尼崎市教育委員会所蔵資料、その他」『摂津加茂』(関西大学文学部考古学研究 第3冊) 関西大学 pp.160-167
- 佐原真 1968 「考古編 2 大阪空港A遺跡」『伊丹市史』第4巻 史料編1 伊丹市 pp.10-19
- 佐原真・横田義章 1968 「考古編 3 加茂遺跡」『伊丹市史』第4巻 史料編1 伊丹市 pp.20-54
- 高井悌三郎 1968 「収蔵考古資料についての覚書」『考古学資料図録』財団法人辰馬考古資料館 pp.151-154
- 富田好久ほか 1969 『川西市農協建設用地事前調査概要』川西市教育委員会
- 石野博信ほか 1971 『川西市加茂弥生遺跡調査概報』川西市教育委員会
- 磯崎正彦ほか 1971 『加茂遺跡—加茂3号線地点緊急発掘調査概要—』川西市教育委員会
- 佐原真 1971 「第2章 考古学からみた伊丹地方・第3節 弥生式時代」『伊丹市史』第1巻 本文編1 伊丹市 pp.83-136
- 亥野彊 1973 「31 壺形土器」『考古学資料図鑑』関西大学文学部 pp.23-24
- 武藤誠 1974 「第2章 考古学からみた川西地方・2 加茂遺跡を残した人々」『川西市史』第1巻 川西市 pp.59-89
- 亥野彊 1976 「考古資料 弥生時代の遺跡と遺物 加茂遺跡」『川西市史』第4巻(資料編1) 川西市役所 pp.10-73
- 岡野慶隆・田中達夫 1976 『川西市加茂遺跡—遺構を中心としてみた遺跡の概要—』川西市教育委員会
- 加茂遺跡研究会 1977 『川西市加茂地区計画および加茂遺跡公園』加茂遺跡を守る会
- 石野博信 1979 「加茂2」『世界考古学辞典(上)』株式会社平凡社 p.223
- 川西市教育委員会編 1980 『加茂遺跡発掘調査概要』川西市教育委員会
- 橋爪康至・岡田務 1981 「兵庫県加茂遺跡の弥生土器絵画資料」『考古学雑誌』第67巻第1号 pp.111-114
- 岡野慶隆・田中達夫 1982 『川西市加茂遺跡—市道11号線建設にともなう発掘調査報告』川西市教育委員会
- 斎藤忠 1984 「加茂遺跡」『日本考古学史辞典』pp.123-124
- 朽木史郎 1985 「郷土史家・福原会下山人略伝」『神戸史談』第257号 神戸史談会 pp.33-35
- 末永雅雄 1986 「摂津加茂遺跡の調査」『常歩無限 関西大学考古学廿年の歩み』関西大学教育後援会 pp.51-64
- 水口富夫 1987 『収蔵資料目録 1 福原会下山人コレクション目録』兵庫県立歴史博物館 pp.1-22
- 財団法人辰馬考古資料館 1987 「1 加茂遺跡」『山田博雄収集資料目録』財団法人辰馬考古資料館 pp.2-7、pp.48-55、図版1-2
- 田岡香逸 1987 「序言」『山田博雄収集資料目録』財団法人辰馬考古資料館(巻頭)
- 高井悌三郎 1988 「収蔵考古資料についての覚書」『考古学資料図録』財団法人辰馬考古資料館 pp.151-154
- 川西市教育委員会 1988 『川西市加茂遺跡—第81~83・85~91次発掘調査報告』川西市教育委員会
- 田中達夫・岡野慶隆・祭本敦士 1992 「加茂遺跡」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県 pp.234-236
- 川西市教育委員会 1994 『川西市加茂遺跡—第117・125次発掘調査報告』川西市教育委員会
- 村尾政人 1995 『摂津加茂遺跡 第138次発掘調査概要報告書』淡神文化財協会
- 武知京三 1995 「大和売薬業者の経営理念小史」『商経学叢』42-2・42-3 近畿大学 pp.443-450
- 家崎孝治 1997 『川西市加茂遺跡—第141次調査—』古代文化調査会
- 西宮市立郷土資料館 1998 『特別展「紅野芳雄『考古小録』~西宮考古学のパイオニア~』(西宮市立郷土資料館第13回特別展示案内図録)
- 亥野彊 1998 「84・85壺形土器」『博物館資料図録』関西大学博物館(編) 関西大学出版部 pp.51-52
- 川西市・川西市教育委員会 2000 『国史跡指定記念 史跡加茂遺跡—弥生時代の大規模集落—』
- 杉山博久 1999 「最後の収集家—上羽貞幸」『魔道に魅入られた男たち—揺籃期の考古学界—』雄山閣出版株式

- 会社 pp.161-186
- 村川義典・西脇対名夫・浅岡俊夫 2001 『川西市加茂遺跡 第84次調査』 加茂遺跡発掘調査団・六甲山麓遺跡調査会
- 加茂遺跡を守る会（編） 2005 『摂津加茂遺跡を守った—住民とともに、情熱をかけて』 伊井孝雄さんの喜寿を祝う会
- 岡野慶隆 2006 『加茂遺跡』（日本の遺跡8） 同成社
- 川西市遺跡調査会・川西市教育委員会 2009 『川西市加茂遺跡 市道化事業に伴う発掘調査報告』 川西市教育委員会
- 関西大学博物館 2010 「目録」『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』 関西大学博物館 p.44、p.74
- 板橋区立郷土資料館・守屋幸一（編） 2011 『平成23年度秋季企画展 明治・大正期の人類学・考古学者伝—学者たちの絵葉書・絵手紙の世界—』 板橋区立郷土資料館 p.32
- 水野正好（編） 2012 「藤澤一夫先生 追悼録」『藤澤一夫先生追悼録刊行会』 藤澤一夫先生追悼録刊行会 pp.5-17
- 神谷正弘 2012 「藤澤先生にお尋ねしました」『藤澤一夫先生 追悼録』 水野正好（編） 藤澤一夫先生追悼録刊行会 pp.54-60
- 水野正好 2012 「藤澤先生と森本六爾夫妻墓塔と」『藤澤一夫先生 追悼録』 水野正好（編） 藤澤一夫先生追悼録刊行会 pp.170-173
- 川西市教育委員会 2016 『史跡加茂遺跡保存活用計画書』 川西市教育委員会
- 長谷川賢二 2016 「館蔵品紹介 笠井新也関係資料」『徳島県立博物館ニュース』No.102 徳島県立博物館 p.5
- 徳島県立博物館 2016 「没後60年 笠井新也」（徳島県立博物館部門展示）（<http://museum.bunmori.tokushima.jp/hasegawa/exhibition/kasai.htm> 2021.12.15閲覧）
- 森下真企 2017 『西宮市指定重要有形文化財「考古小録」及び関係品調査報告書』（西宮市文化財資料第64号）西宮市教育委員会
- 内川隆志（編） 2018-2020 『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』I・II・III（近代博物館形成史研究会）
- 合田茂伸 2018 「本山考古室と紅野芳雄「考古小録」」『阡陵—関西大学博物館彙報—』No.76 関西大学博物館 pp.10-11
- 狭川真一 2019 『瓦仙人の世界—考古学者 藤澤一夫コレクションから—』（公財）元興寺文化財研究所
- 米田文孝・山口卓也・渡邊貴亮編 2020 『なにわ大阪と本山彦一—大正期大阪への貢献と本山考古室—』 関西大学なにわ大阪研究センター
- 石井伸夫 2020 「鳥居龍蔵と本山彦一の交流」『なにわ大阪と本山彦一—大正期大阪への貢献と本山考古室—』 関西大学なにわ大阪研究センター pp.139-156
- 合田茂伸 2020 「紅野芳雄著『考古小録』にみる考古資料収集家」『なにわ大阪と本山彦一—大正期大阪への貢献と本山考古室—』 関西大学なにわ大阪研究センター pp.129-137
- 高坂勇佑 2022 「写真に見るあの日・あの時」『北区飛鳥山博物館だより』2022.3.20 p.6
- 朝井琢也 2021 『加茂遺跡史跡指定20周年記念 令和3年度川西市文化財資料館特別展・摂津加茂遺跡里帰り展』 川西市教育委員会
- 川西市教育委員会 2021 『加茂遺跡と弥生大規模集落—シンポジウム資料集—』（加茂遺跡史跡指定20周年記念シンポジウム）
- 安岡早穂 2023 「『遠里小野町』周辺採集の漁撈具」『大阪歴史博物館研究紀要』第21号 pp.43-50
- 合田茂伸・今井真由美 2023 『摂津加茂遺跡発掘70年展』（2023年度関西大学博物館春季企画展） 関西大学博物館 川西市教育委員会、川西市 1996～ 『平成7年度～川西市発掘調査概要報告』



写真1 宮川雄逸1
(宮川範子氏提供)



写真2 宮川雄逸2 (1933年5月5
日撮影・宮川範子氏提供)



写真3 宮川石器館外観 (2022年4月28日撮影)



写真4 宮川石器館展示室 (2022年4月28日撮影)



写真5 筭井新也
(徳島県立博物館提供)



写真6 本山彦一 [未永 1935]

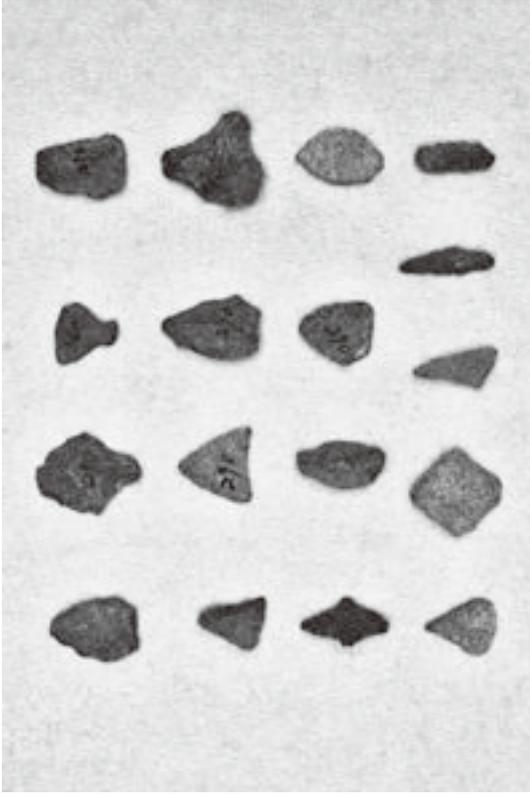


写真8 本山彦一収集資料(摂津加茂遺跡) 2
(関西大学博物館蔵 2024年2月20日撮影)

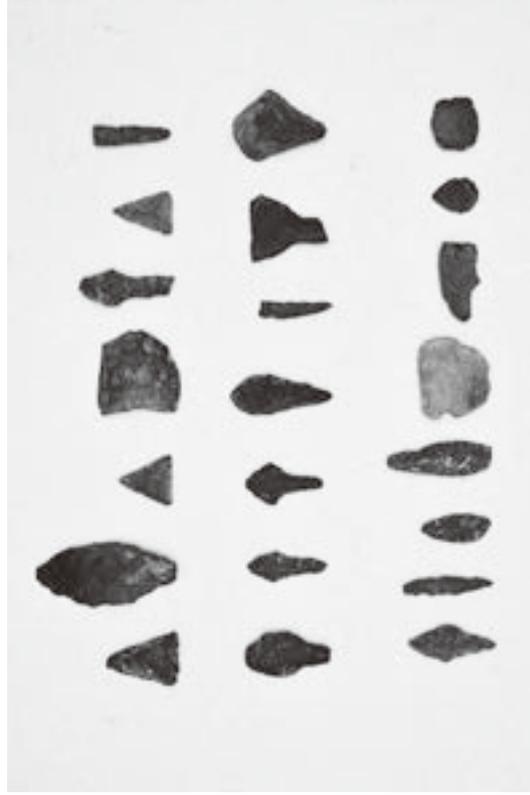


写真10 紅野芳雄収集資料(摂津加茂遺跡)(原品は西宮市所有・西宮市立郷土資料館蔵 2022年1月31日撮影)

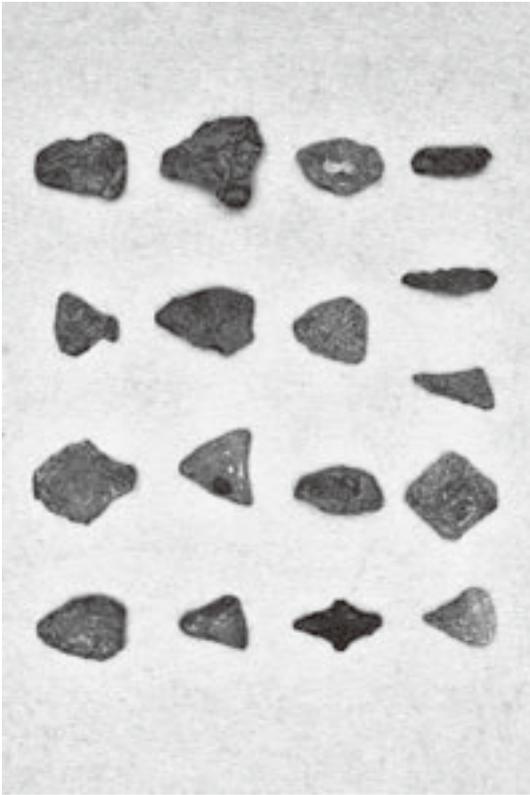


写真7 本山彦一収集資料(摂津加茂遺跡) 1
(関西大学博物館蔵 2024年2月20日撮影)



写真9 山田博雄(公益財団法人
辰馬考古資料館提供)



写真11 岡崎順二収集資料1 (摂津加茂遺跡・弥生土器) (原品は尼崎市教育委員会所有・尼崎市立歴史博物館蔵 2022年2月26日撮影)



写真12 岡崎順二収集資料2 (摂津加茂遺跡・玉類ほか) (原品は尼崎市教育委員会所有・尼崎市立歴史博物館蔵 2022年2月26日撮影)



写真13 福原会下山人コレクション1 (A9a021-1—A9a021-5 摂津加茂遺跡) (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真14 福原会下山人コレクション2 (A9a021-1—A9a021-5 摂津加茂遺跡) (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真16 福原会下山人コレクション4 (A9a006-1-A9a006-10摂津加茂遺跡) (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真18 福原会下山人コレクション6 (A9a006-11-A9a006-20摂津加茂遺跡) (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真15 福原会下山人コレクション3 (A9a006-1-A9a006-10摂津加茂遺跡) (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真17 福原会下山人コレクション5 (A9a006-11-A9a006-20摂津加茂遺跡) (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真19 福原会下山人コレクション7 (A9a006-21—A9a006-30) 摂津加茂遺跡 (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真20 福原会下山人コレクション8 (A9a006-21—A9a006-30) 摂津加茂遺跡 (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真21 福原会下山人コレクション9 (A9a006-31—A9a006-40) 摂津加茂遺跡 (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真22 福原会下山人コレクション10 (A9a006-31—A9a006-40) 摂津加茂遺跡 (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真24 福原会下山人コレクション12 (A9a006-41—A9a006-50)摂津加茂遺跡 (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真26 福原会下山人コレクション14 (A9a006-51—A9a006-60)摂津加茂遺跡 (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真23 福原会下山人コレクション11 (A9a006-41—A9a006-50)摂津加茂遺跡 (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真25 福原会下山人コレクション13 (A9a006-51—A9a006-60)摂津加茂遺跡 (原品は兵庫県立考古博物館蔵 2021年12月1日撮影)



写真27 真野修収集資料 1
(原品は明石市立文化博物館蔵 2023年10月25日撮影)



写真28 真野修収集資料 2
(原品は明石市立文化博物館蔵 2023年10月25日撮影)



写真29 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料 1
(2024年 1月16日撮影)



写真30 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料 2
(2024年 1月16日撮影)



写真32 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料4
(2024年1月16日撮影)



写真34 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料6
(2024年1月16日撮影)



写真31 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料3
(2024年1月16日撮影)



写真33 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料5
(2024年1月16日撮影)



写真35 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料 7
(2024年1月16日撮影)



写真36 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料 8
(2024年1月16日撮影)

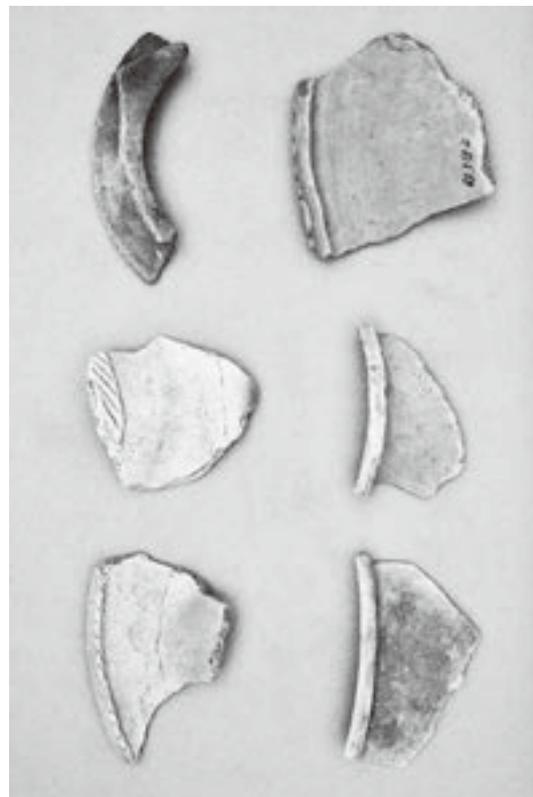


写真37 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料 9
(2024年1月16日撮影)



写真38 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料10
(2024年1月16日撮影)



写真40 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料12
(2024年1月16日撮影)



写真42 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料14
(2024年1月16日撮影)



写真39 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料11
(2024年1月16日撮影)



写真41 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料13
(2024年1月16日撮影)

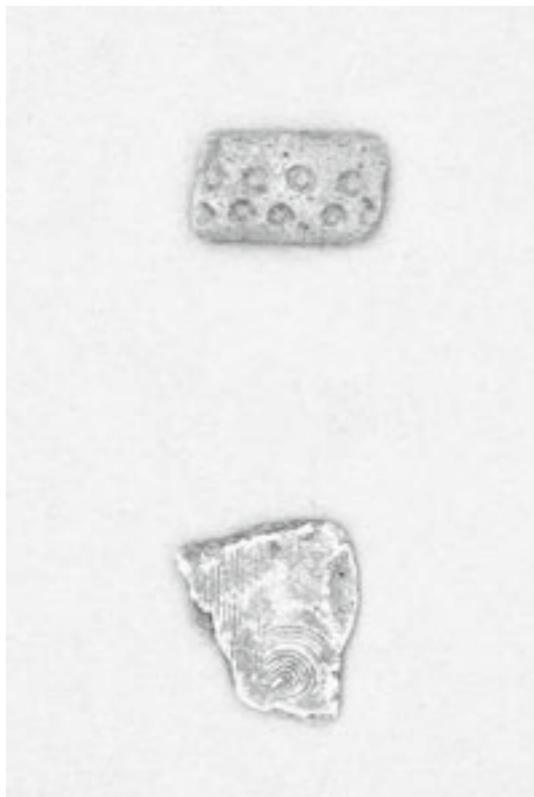


写真43 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料15
(2024年1月16日撮影)

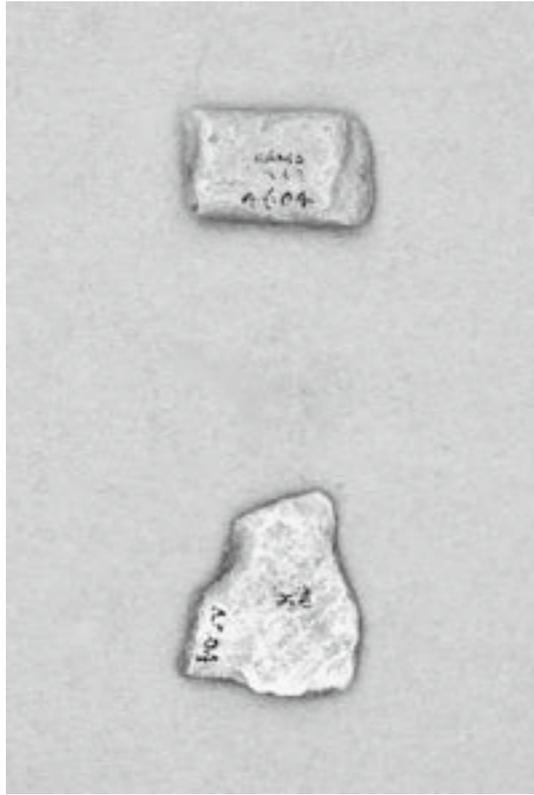


写真44 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料16
(2024年1月16日撮影)



写真45 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料17
(2024年1月16日撮影)



写真46 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料18
(2024年1月16日撮影)

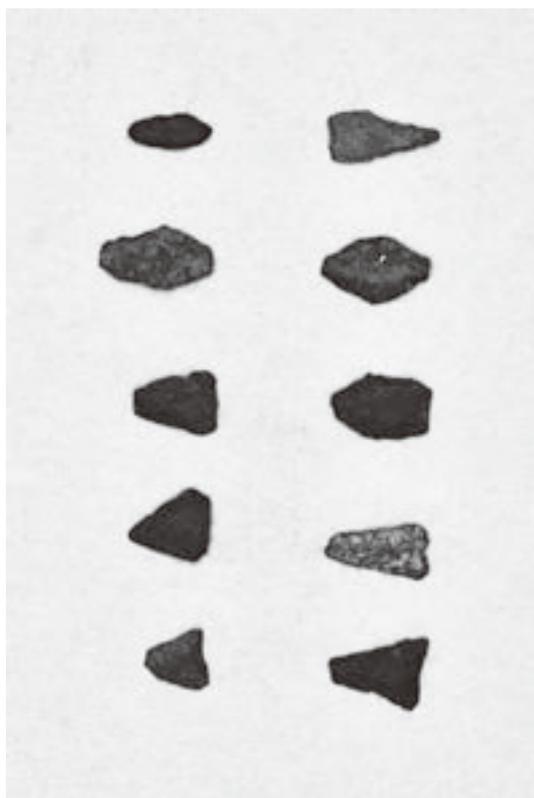


写真48 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料20
(2024年1月16日撮影)

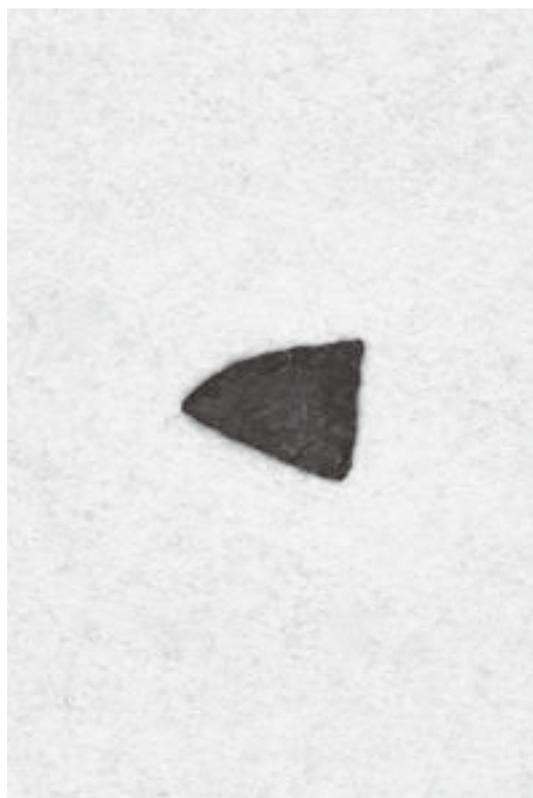


写真50 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料22
(2024年1月16日撮影)

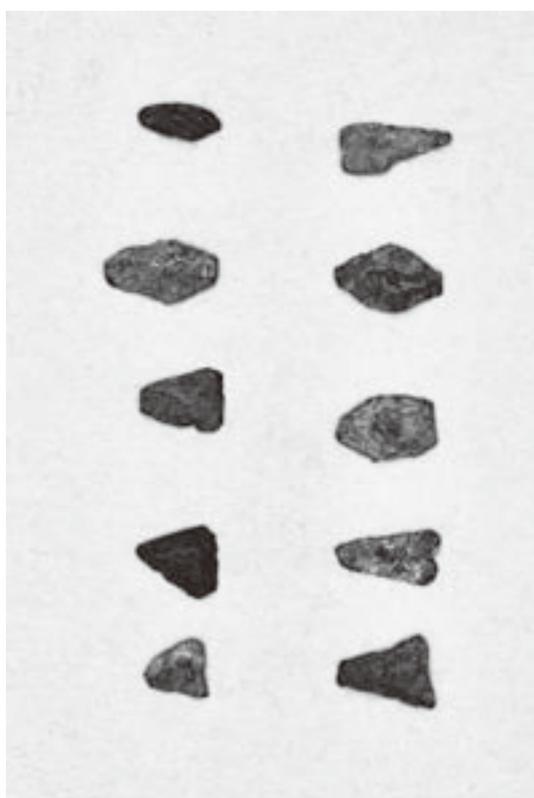


写真47 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料19
(2024年1月16日撮影)



写真49 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料21
(2024年1月16日撮影)

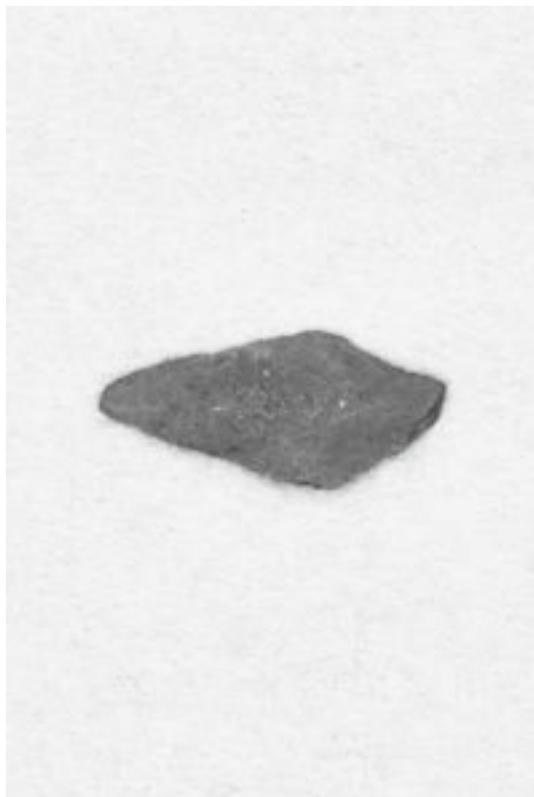


写真51 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料23
(2024年1月16日撮影)



写真52 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料24
(2024年1月16日撮影)



写真53 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料25
(2024年1月16日撮影)



写真54 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料26
(2024年1月16日撮影)



写真56 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料28
(2024年1月16日撮影)



写真58 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料30
(2024年1月16日撮影)



写真55 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料27
(2024年1月16日撮影)



写真57 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料29
(2024年1月16日撮影)



写真59 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料31
(2024年1月16日撮影)



写真60 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料32
(2024年1月16日撮影)



写真61 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料33
(2024年1月16日撮影)

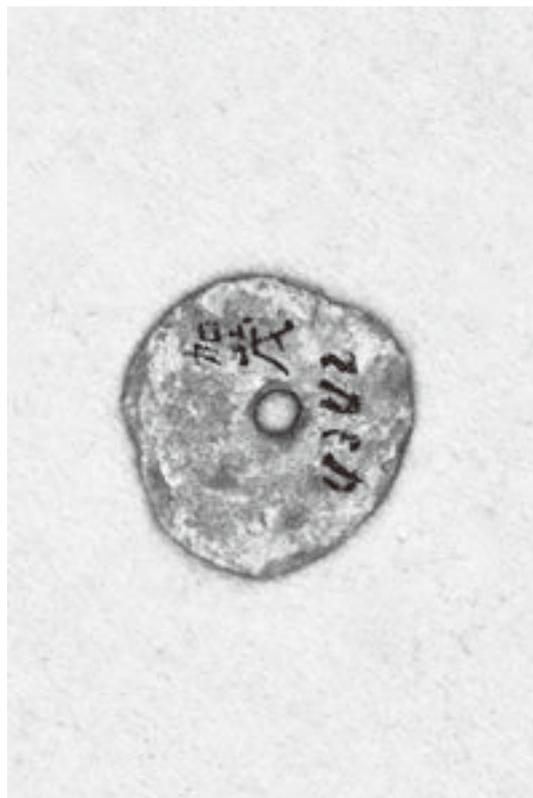


写真62 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料34
(2024年1月16日撮影)

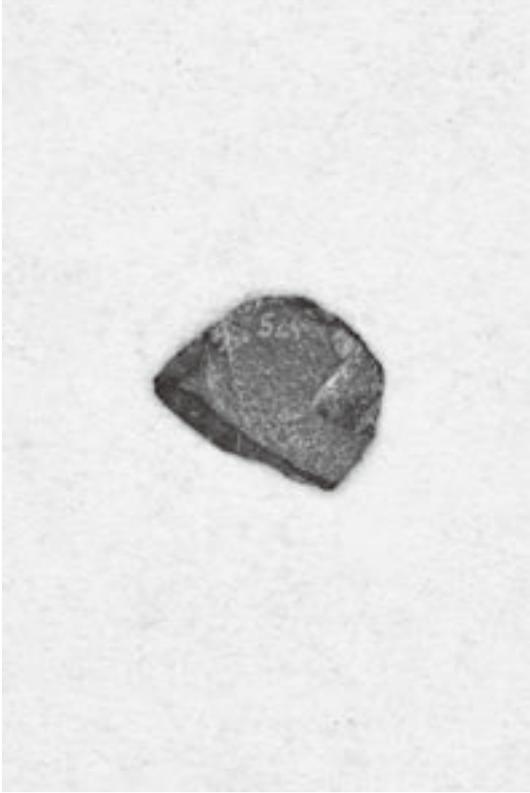


写真64 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料36
(2024年1月16日撮影)



写真66 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料38
(2024年1月16日撮影)

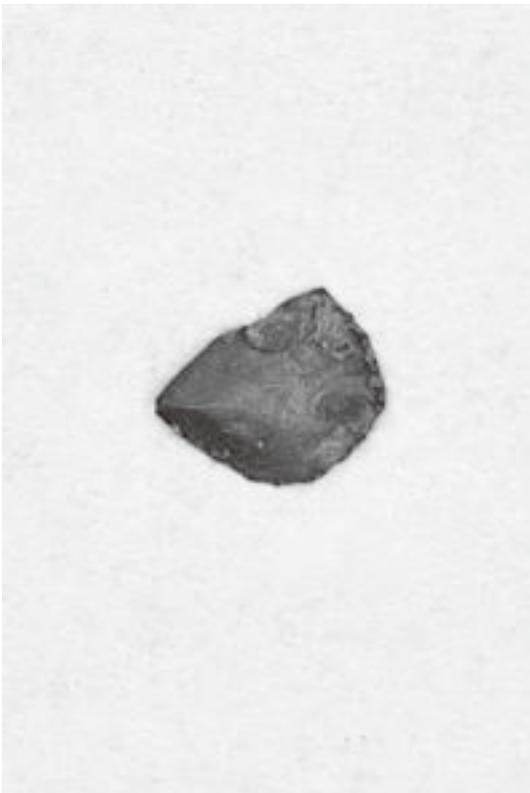


写真63 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料35
(2024年1月16日撮影)



写真65 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料37
(2024年1月16日撮影)



写真67 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料39
(2024年1月16日撮影)



写真68 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料40
(2024年1月16日撮影)

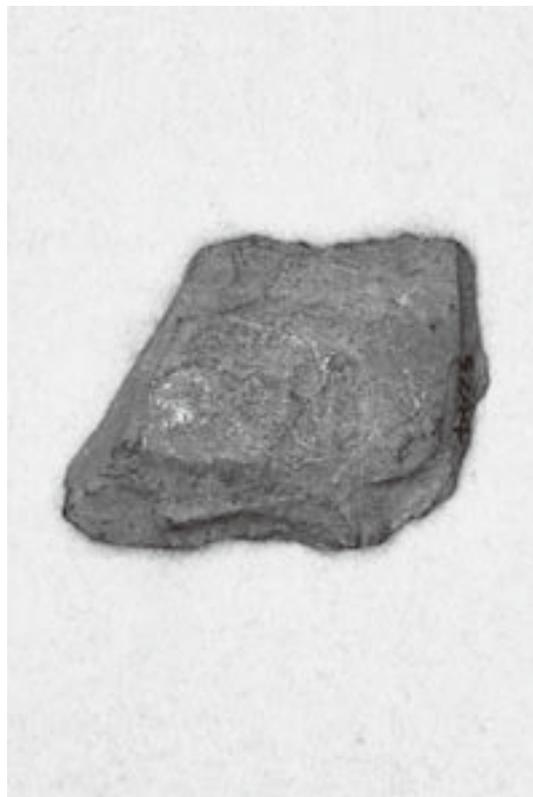


写真69 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料41
(2024年1月16日撮影)



写真70 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料42
(2024年1月16日撮影)



写真72 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料44
(2024年1月16日撮影)

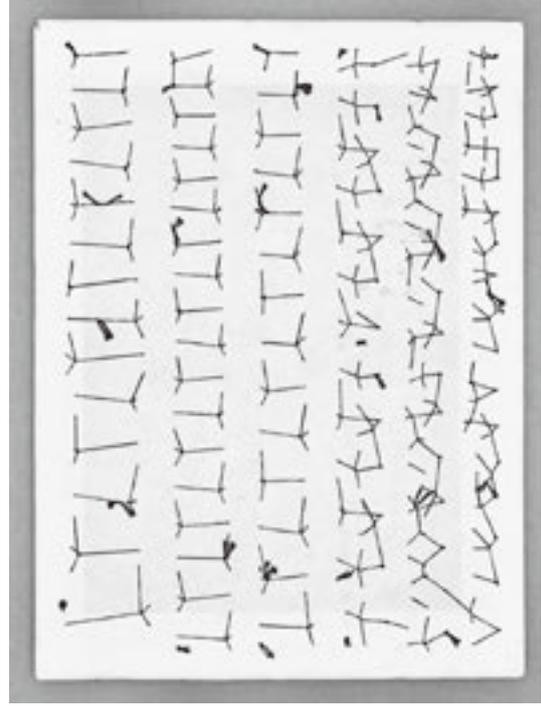


写真74 清海慶治収集資料2
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)



写真71 京都大学総合博物館蔵加茂遺跡出土資料43
(2024年1月16日撮影)

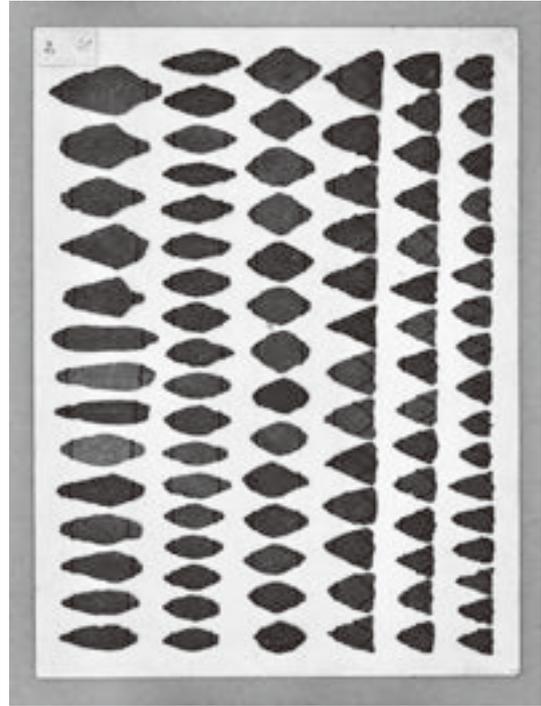


写真73 清海慶治収集資料1
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

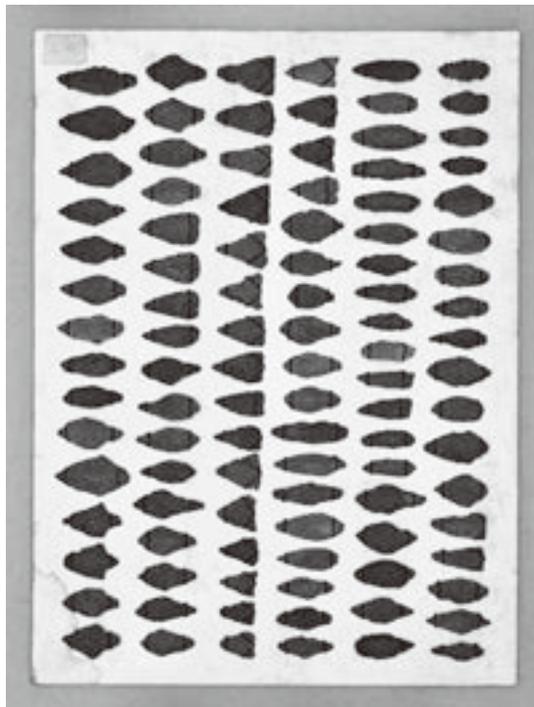


写真75 清海慶治収集資料3
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

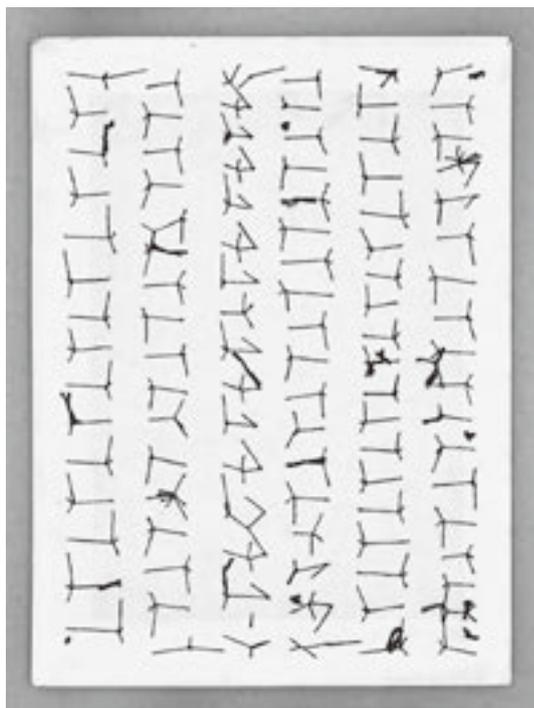


写真76 清海慶治収集資料4
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

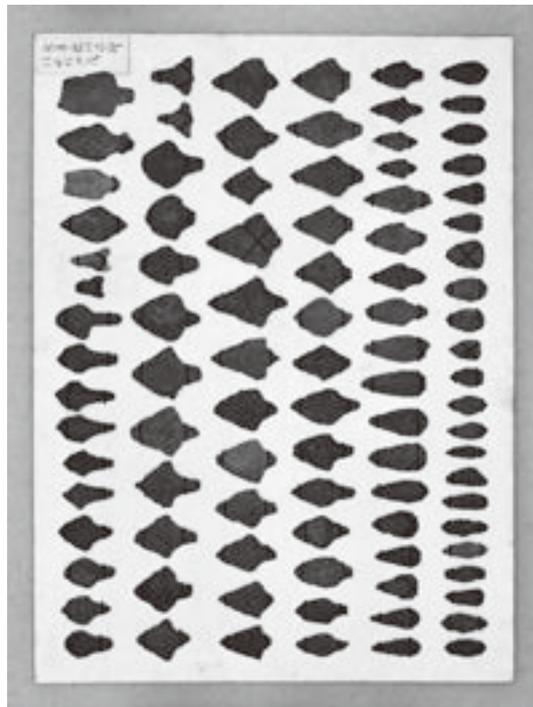


写真77 清海慶治収集資料5
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)



写真78 清海慶治収集資料6
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

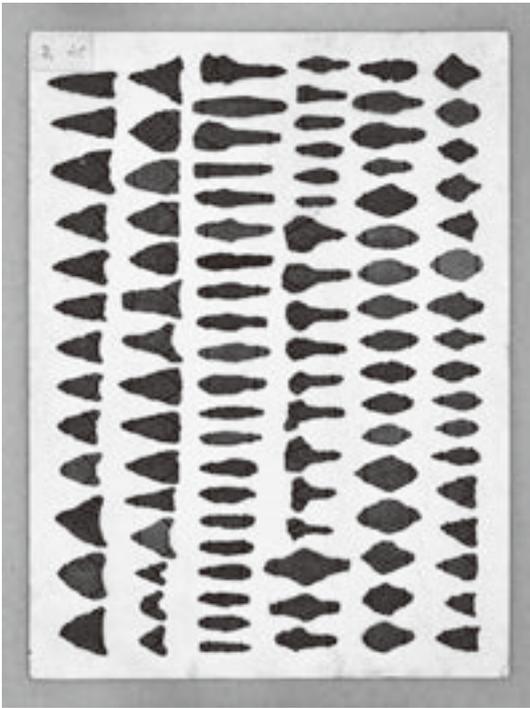


写真79 清海慶治収集資料7
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

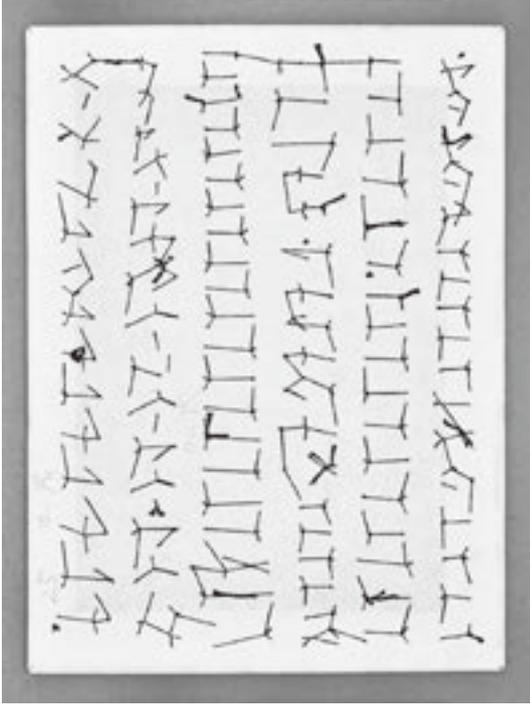


写真80 清海慶治収集資料8
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)



写真81 清海慶治収集資料9
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)



写真82 清海慶治収集資料10
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

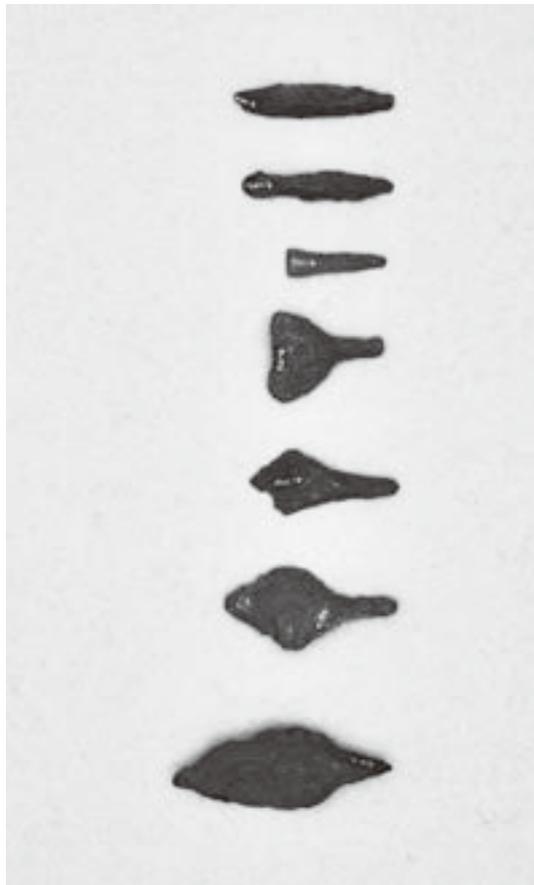


写真83 清海慶治収集資料11 (原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)



写真85 清海慶治収集資料13
(原品は大阪歴史博物館蔵
2023年11月29日撮影)



写真84 清海慶治収集資料12
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

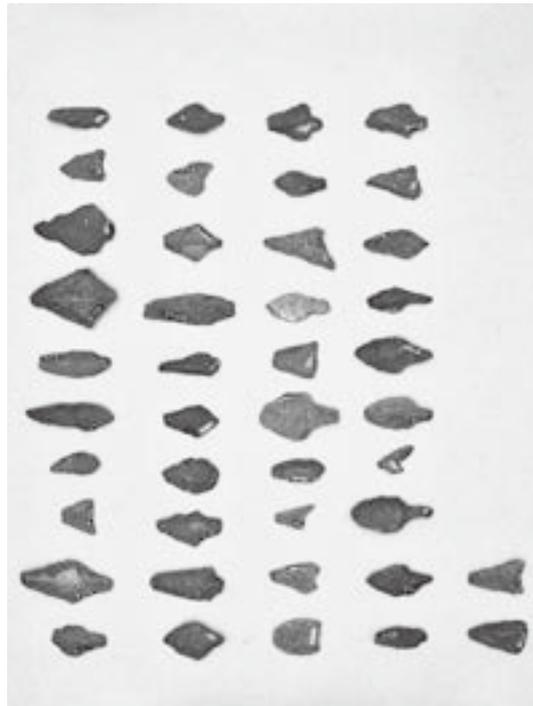


写真87 清海慶治収集資料15
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

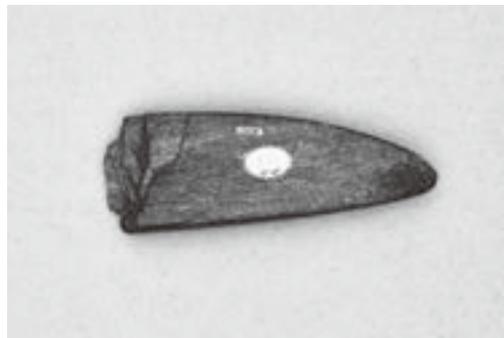


写真86 清海慶治収集資料14
(原品は大阪歴史博物館蔵
2023年11月29日撮影)



写真89 清海慶治収集資料17
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

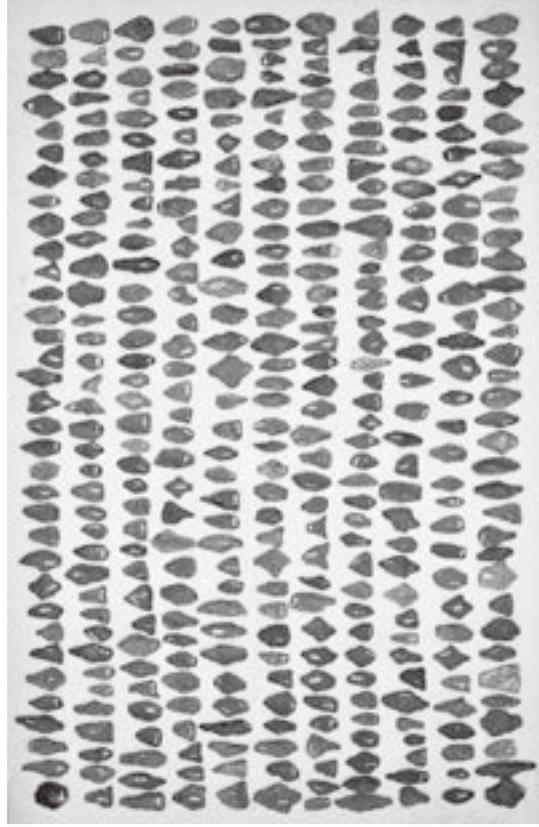


写真91 清海慶治収集資料19
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

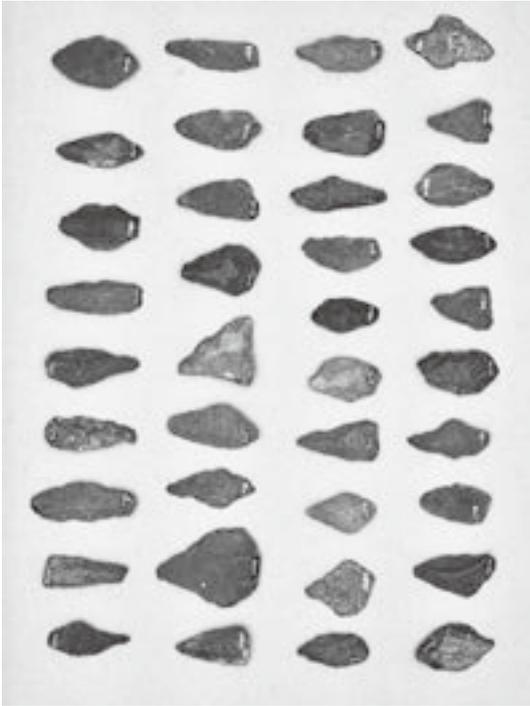


写真88 清海慶治収集資料16
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)



写真90 清海慶治収集資料18
(原品は大阪歴史博物館蔵 2023年11月29日撮影)

